
獵犬たち The vindictive man

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獵犬たち The vindictive man

【NZコード】

N4784W

【作者名】

ジエフティ

【あらすじ】

14歳の解放戦線、衣笠内閣総理大臣による擬似クーデター事件から約5年。水面下で右翼と左翼の対立が激化していた。それと同時に発生する隠蔽された連続殺人事件。官僚と政治家が次々と殺される中現れる仮面の男。国家公安委員会がひた隠しにする事件と激しさを増す対立。激化する状況の中で新たなメンバーを迎えたハウンドドッグ、彼等は一体どうするのか

本作は『獵犬たち』『14歳の解放戦線』の続編にあたります。まずはそちらを読んで頂いてから本作を読むことをお薦めします。また、本作はフィクションです。実在する企業、団体、人物とは一切関係ありません。

「大臣、ここは獵犬の出る幕ではないでしょ？」

狭い車内に設けられた小さな会議スペース。そこには背広姿の者が3人座っていた。防衛大臣、警視総監。そして国家公安委員長。そうそうたる顔ぶれである。

「既にテロ対策マニュアルに基づいてS A Tが出動している。何も心配はいらん」

髭の濃いふくよかな男がそう答える。

「大臣、私が言いたいのはそういうことではなく」

「…私が、」

会話を切り裂くように女性が割り込む。赤いスーツを着た女性。彼女こそが今の日本の国家公安委員長、御子沢 遥。

「私が依頼したんです。いいわよ沙紀、入って」

彼女がそういうと途端に薄暗い車内に電灯の光が差し込む。時刻は既に10時を回っているというのに夜の街という奴は明るい。

「どうもおー、ハウンドドッグでーっす」

眉間にシワを寄せる大臣と警視総監。対する彼女、加藤沙紀は腰に手を当てて御子沢の方を見る。御子沢も御子沢で手を頭にあててやれやれとやっている。

「沙紀、今あなたに言いたいことは山ほどあるけど一番言いたいことだけ言つわ。事件の要点つて奴をね」

「いーいい、みんなあ？ 今度はちゃんと大臣達からも承諾を得たわ」

BMWのZ4、カーステレオの部分に半ば強引に取り付けた無線機から課長の声が聴こえる。

「今、このすっげー豪華な料亭の中に国務大臣三人とその補佐官一

人がテロリストによつて人質になつちゃつたの。んでS A Tが大臣達わ助けるからあみんなわ補佐官を殺害。いいわね？」
了解、とそれだけ俺は返す。

「いいんですか？そんな簡単に殺しちゃつて？」

助手席に座るブロンド髪の少女が俺に問う。

「ああ、あの補佐官は前々から暴力団との関係が噂されていた。そして公安の連中が殺すチャンスを見計らつていた」

「それでそのチャンスが今つてことですか？」

「そういうことになるな」

俺はドアを開けるとトランクへと向かう。キーに設けられたボタンを押すと電子音と共にトランクのロックが解除された事を合図する。黒いＺ４のトランクの中にはジュラルミンケースのような箱が敷き詰められている。長方形のモノから小さな物や大きな物まで。俺はその中から比較的小さめなケースを取り出すと持ち手の近くのロックを外してケースを開く。そのケースの中には又も黒いものが入つていた。

G 33、オーストラリア製のポリマーフレームオート。俺はその銃を掴みスライドを引く。

「嶺崎、ターゲットの位置は？」

「ちょっと待つて……」

そういうと彼女はポケットから地図と振り子を取り出す。これは所謂ダウジングというやつだ。アメリカとかでは結構採用される事もことも無きにしもあらずらしいが日本はあまり導入されていない。そう、彼女『嶺崎 エトリエル 佳奈』は詰まるところが超能力捜査官というやつだ。課長が無理を言つて引き入れたらしいが詳しいことは俺もよくわからない。

「出た、料亭の入口付近。応接室の椅子の上」

そういう彼女の手に持つた振り子は何かで固めたように一点を指し示している。

「わざわざ入口にいてくれるなんて御丁寧な事だ」

そう言つと俺はG33を腰のホルスターに収めると課長曰く『すりげー豪華な料亭』へと足を運んだ。

バンッ、という銃声が鳴り響いた。

「…突入を早めるぞ、全員配置につけ！」

SATの隊長と思しき黒いBDUと防弾チョッキを受けた男がそう叫ぶ。それから間も無くしてドアにはセムテックスが仕掛けられる。

「アルファ、ゴー！」

男がそう叫んだ途端、セムテックスが爆発し埃を舞い上げた。煙の立ち上る部屋の中をMP5に取り付けられたライトが切り裂くように照らす。

「おい、これはどういう事だ…」

一人の隊員が言葉を漏らす。そこにいたのはテロリストでも何でもない。ただの肉片と返り血にまみれながらも拘束され、自由を奪われた大臣だった。そしてそこに補佐官と呼べるような『モノ』は無かった。

国務大臣の拘束された事件から一日。都内のある居酒屋に部隊を取り仕切つた二人の女性がいた。

知る人ぞ知る。という感じを匂わせる店内からはもう何年も前の歌謡曲がノイズまじりに流れている。まるで当時のラジオ番組でも聞いているかのように。

「全く、昨日はしてやられたわ」

枝豆を摘みながら話す黒髪の女性。見た目からすれば20代後半と言つても通じそうな美貌を持つ彼女の本当の年齢は一倍の40代後半である。彼女の名前は御子沢遙。昨日の事件をハウンドドッグへと委譲した際の立役者となつた公安委員長である。

対して座るのはそのハウンドドッグの管理職である加藤沙紀。くしやくしゃの短髪を振り乱しながらさつきから一升瓶で酒を飲んでいる。

「まあまあ、どうせアンタだつてさあウチに任せた時つから薄々勘づいてたんっしょ？」

「それはそうだけど、手塩に掛けたS.A.Tが突入する前にたつた4人の部隊に制圧されるなんて…」

「あつ、うち一人は非戦闘要員よー？」

そう言われて御子沢はさらに肩幅が小さくなる。

「んで、私を付き合わせた理由ってのはあ飲むためじゃあないんでしょうねえ？」

「ええ、依頼していことがね」

そう言うと御子沢は茶色のビジネスバッグのジッパーを開ける。そうしていくつかのポケットをあさつた後、一枚のファイルを差し出す。

「政府関係者連続殺傷事件：こんなもんいつ起きてたのよ？」
資料には事件名、そしてその被害について記載されてあつた。被害

にあつたのは外務省、財務省、厚生省、防衛省、文部科学省、農林水産省、総務省…と上げ出したら切りがない。各省庁の幹部がことごとく殺害され、さらには衆議院議員と参議院議員も一人ずつ殺害されている。

「こんなに死んでいてよくもまあ隠し切れたわね…」

「まあ、衣笠内閣お得意の隠蔽つて奴よ」

御子沢は皮肉るように言い放つた。事実上衣笠の部下である彼女がこのような事を言うのはそうそうない。

「んで、それをウチに解決してもらいたいと」

「ええ、知つてのとおり今の霞ヶ関は衣笠を筆頭とする国民党と日本新党の渋沢達雄を軸とする左翼の対立が大分激しくなつてゐる。この状況で火に油を注ぐなんてマネはしたくないのよ」

「なるほどねえ」

加藤は資料を自分のビジネスバッグへと仕舞う。

「犯人の目星つてのはついてんのかしらん?」

「そこが難点なのよ」

御子沢は右手に持つたビールの注がれたグラスを口に運びながら言う。

「この犯人、政府関係者の可能性が高い。あらゆる警戒網の穴をくぐり抜けている。そのせいでつかめる情報もたつたこれだけよ」すると御子沢はビールを一気に飲み干し、空いた手でバッグから一枚の写真をとりだす。そしてその写真を加藤へと差し出した。

「これは」

「猶奇殺人なのか、それとも計画的な犯罪なのか…」

その写真に映つていた物は鬼の能面を被つたコートの男だった。男は日本刀を持ち、返り血でびちゃびちゃになりながらも刀を鞘へと収めようとしている。彼の足元には胸元を切り裂かれドクドクと血を溢れさせて倒れる死体。そして何より一番おぞましいのはその『鬼』の目がカメラのをしっかりと見ていたこと。加藤は一気に背筋が凍つた。

「取り敢えず調べて見ないことには私からはなーんにも言えないわねえ」

「ええ、頼んだわよ。アンタのとこ新しい子が加わったんでしょう？」

御子沢がグラスにビールを注ぎながらそつまつと加藤は「嶺崎ちやんの事ね」と相槌をうつ。

「全く、あんたより上に行つたのに私は上の命令を聞いて、沙紀はFBIにスカウトされそうな子を引き抜くなんて馬鹿やつてさ。沙紀、いつになつたら公安に戻る気になるの？」

「そうねえ」

途端、加藤が神妙な面持ちになる。

「気がむいたら、かな」

そう言うと「巫女沢が答えになつてないわ」と怒り出す。

「まあ、今日はごっそさん」

すると加藤は急に立ち上がり、一升瓶を持ったまま店の入口へとかけていく。因みに伝票は御子沢のいるテーブルに置かれたままである。

「クソつ、今日もやられるなんて」

そう言って御子沢は机に突つ伏した。

平日の昼下がり。俺は人民党の本部へと向かっていた。目的は鬼武者と呼ばれる連続殺人犯の逮捕。最初にその事件について耳にしたときは驚いた。既に一桁の人数が殺されたりというのに全く情報が回つてこなかつたからだ。やはりその裏には今の政府の状態も関係関係しているとは思うが。

「にしてもこれほど証拠がないなんて…」

助手席の嶺崎がぼやく。無理もない、今ある情報は監視カメラの撮つた写真のみ。あとは推理していくしかない。

現状分かっていることは奴は衣笠の側近を狙っているということ。
既に衣笠の右腕とも言われる大物議員が殺害されている。メディア
が嗅ぎつけないのがおかしいぐらいの大事だ。そして彼の側近の中
でも重要な人物が殺されるのではないかと課長は睨んだ訳だ。そう
言つた理由で俺は衣笠が党首を務める人民党の本部へ向かっている。
嶺崎は念のため、別に彼女の能力を過小評価してゐるわけではない。
それなりの実績を上げてゐるがオカルトといつのはあまり信用なら
ない。そのため彼女はいざとなつたとき遺留品などからダウジング
をしてもらおうと考えている。

「でも、やっぱり変な事件よね」

嶺崎が写真の「ペリーを見つめながら囁つ。

「確かに鬼の面を被つて犯行に及ぶといつのはな

「そうじやなくつて！」

嶺崎は写真を後部座席に置くと腕を組む。

「ほら、だつてさここまで左翼つぶりを見せちゃ対テロ法とかで無
理矢理なんとか出来ないのかしら？ S A Tとかに射殺命令とかだし
ちゃつてさ。メディアに露呈したくなくても手の打ちようはあつた
んじやない？」

俺はハンドルを切り、左折する。こうしてみてみるとこの辺りは政
治家が乗るような高級車をよく見かける。

「嶺崎、俺たちの元に回ってきたという事は正攻法ではなんとかな
らん事件だと思え。それに奴が一概に左派とは言えない。殺害され
た内、衣笠と関係の無い検事や内調のヒーローントも結構いる。そ
ういう面倒な事が回つてくるんだ」

俺がそう言つと嶺崎は何も言わずにフロントガラスを見つめる。歩
道に植林された木は葉を落とし、秋から冬への移り変わりを感じさ
せていた。

数時間前 都内某オフィスビル

「さつてえ、今度の事件はスペシャルな感じよーん」

その日、課長はいつもと変わらぬ調子でビルへ入ってきた。

「んじや、未来ちゃん頼んだわ」

そう言って彼女は大辺の肩をぽんと叩いて自分の執務室へと戻つていいく。

「えっと、それじゃ私の方から今回の事件について説明します」

そういうと大辺はリモコンのような物を使い、プロジェクターを起動する。

「本件は政府関係者を狙った連續殺人事件です。今のところの被害者は
者はこの通りです」

大辺がそう言うと画面が移り変わり白黒の無機質な名簿へと変わる。
そこにはびつちりと人の名前が記されている。

「うわ、こんなにいるんかよ… いつのまに…」

拳隆が声を漏らす。無理もない、この量死んでいてここまで隠蔽しているとなると相当だ。

「本件は国家公安委員会からの依頼となります。犯人と思われるのはこの人物」

画面が切り替わる。監視カメラの映像が映し出される。

「この映像に映っている仮面の男が犯人だと思われます」

「にしても手掛かりが少なすぎないか？ 公安は何をしてたんだよ？」

「ここまで死んでいたさ」

「政府関係者の犯行か」

俺がそう言つと大辺が小さく頷いた。

俺たちがもうすぐ人民党本部へと到着するという所で急に携帯が鳴り響いた。一旦車を歩道側に寄せ、ハザードを付けると俺はポケットから取り出した黒い携帯を耳元へ当てる。

「どうした？」

一言田はそれだった。相手は大辺だったので俺は何か掴めたのだろうと思つたからである。

「ええ、ついさっき人民党本部のポストに三つ巴の記された犯行予告が送り付けられてたの。狙いは課長の睨んだ通り衣笠の側近よ」

「三つ巴」

三つ巴と言えばコソマや勾玉のような形をした巴が三つ描かれている伝統的な文様だ。よく和太鼓などに描かれていたり家紋に使われていたりする。そして何より三つ巴は『鬼』と関係している。それは鬼武者の犯行予告と見て違ひはないだろう。

「しかし妙だな」

「ええ、今まで犯行予告なんてしてなかつたのに何で……」

何かがある。俺はそう思えてならない。いや、そう思うのが自然なのだろう。

本当に奴の狙いは衣笠の側近なのか？根本的な事を疑う。しかし奴に関することは全く分かつていない、推理することさえ出来ない。つまり直接本人に聞くしか無いということ。

「分かつた、目標は俺がなんとかする。必要に応じて拳隆も駆り出せるようにしておけ」

俺がそう言つと大辺は了解と言つて通話を切つた。俺はツーツーといふ音で通話が終わつた事を確認すると携帯をポケットにしまい、ハンドルに手を戻す。

「いいか、お前は絶対に犯人の前にでるな」

助手席の嶺崎に強い口調で忠告する。対する嶺崎は「好きで戦いになんて巻き込まれないよ」と随分と呑気な事を言つている。やれやれと頭をなで下ろした後アクセルを大きく踏み込んだ。エンジンの重低音が響き、体を震わせる。急な発進に驚いたのか嶺崎は体を縮こませた。

車を停め、本部の中へと俺と嶺崎は足を踏み入れた。既に犯行予告の件は知れ渡っているらしく所属議員達からは妙な焦りを感じ取ることができた。特に狙われている側近の者は相当怯えているのではないだろうか。

課長から連絡が来ていたのだろうか。受付の女性が営業スマイルを見せた途端、俺たちが何者なのか分かったようで一瞬にして顔色が変わった。

俺はいつものように警察手帳を取り出すとそれを彼女に見せる。俺の後ろの嶺崎も洋服のポケットから手帳をとりだす。勿論これはダミーだ。俺達は本来存在しない組織なのだから。

すると受付の女性は笑みを取り戻し、三階へ行けと案内した。そこに鬼武者の標的がいるという事だ。

入口から少しばかり右に行つた所にあるエレベーターに乗る。無駄に豪華なエレベーターは国民の血税を浪費している事を現している。チーンという昔ながらのエレベーターの音が響き、目的の三階へ到着する。俺が「開」と書かれたボタンを押すと嶺崎がそこを通る。確かにこの廊下の突き当たりがその代議士の居場所だった気がする。人民党の本部は騒がしかつた。殺人予告が届いて慌ただしくなりのもうそだが普通の警察機関でなく俺たちが来ている事にさらに驚いているのだろう。

「ねえ、さつきから変な目で見られてるような気がするんだけど…」

嶺崎は顔を歪ませながらそう言つ。

「いつもの事だ。慣れなければここでは喰つていけんぞ」「

俺は冷めた口調でそう言つとドアの前で立ち止まる。無論、ここが目的地だからだ。

コンコン、一回ノックする。だが反応はない。

聞こえていなかつたのかと俺はもう一度ノックする。今度は先程よりも強く。

しかし、全く反応はない。

「下がつていろ、嶺崎」

左手で嶺崎を抑え、右手で銃を引き抜く。

「ちょっと、まさか…」

「荒っぽいが、可能性は否定できないからな」

扉を蹴る。ドンッという大きな音がしてドアが前へと倒れ埃を巻き上げる。既に俺は周りの議員から注目の的だ。

だが、その注目は一瞬にして俺から俺の前のモノに変わった。
そこにあつた『モノ』

死体と鬼。返り血にまみれたコートを着た鬼と鮮やかな赤に染まったスーツの男。

案の定、既に手遅れだった。

代議士の姿は実に無残だった。両腕を切り落とされ、胸を突かれて血がドクドクと溢れしていく。美しい赤は灰のカーペットを赤黒く染め上げ、鬼の真っ白なコートも真紅の模様を付けていく。

俺は銃を向けたまま動くなと言つ。だがその途端に鬼は余裕を見せるかのように刀を鞘へと収める。

「動くなと言つたはずだ」

足へ一発。45口径が直撃コースに入る。しかし鬼はその銃弾が放たれるのを見切つたかのように右足を後ろへスッと移動させる。その動きはまさに侍のように。

すると鬼はそのまま窓へと走り出す。両腕を前でクロスさせてジャンプする。パリンッという破裂音がして奴はそのまま下の造園に落下する。俺もそれを追うように窓から飛び出す。それと同時に建物へと反転しワイヤーガンを窓へ放ち、降下する。これで奴から多少の遅れは取り返せると急いでワイヤーガンのトリガーを引き窓へ引っかかっていたワイヤーを仕舞う。

「ちょっと！どうするつもりよ！？」

窓から大声を張り上げる嶺崎。だが今の俺に彼女の相手をしている暇は無かつた。鬼は返り血のついたコートを翻しながらZ4の横に止められたバイクにまたがっている。無論、このままみすみす逃が

す訳にはいかない。

俺も急いで走りながらキーのロックを解除し、ドアを開けエンジンをスタートさせる。シートベルトなんていちいちしている余裕も無く俺はアクセルを強く踏み込んだ。

「クソツ、公道でこんなにも」

霞ヶ関の大通り。ヘルメットも何もせずに鬼はコートをはためかせながら走行していた。その速度はかなりの物でヘルメットもなしに対向車をすり抜けていくなんて恐ろしいマネも披露してくれている。すると途端に俺の携帯に大辺から着信が入る。俺は運転に集中したいところなので左手でうろ覚えの説明書を頭に思い浮かべてハンズフリー モードで電話に出る。

「何があつた、こつちは目標とカーチェイスちゅうだが」

「大変よ、やはり予感は的中していたわ」

大辺が俺の話をそつちのけて言つ。

「さつきから政府機関からの死亡者が湧くようにあがつてきてるわ。しかも皆鬼の面を被つた男に殺されたらしいわ」

「じゃあ奴は複数犯だつたと？」

俺はアクセルを踏み込んで信号機を無視する。トラックの運転手が俺の方を見ながら叫んでいたが無視して走り続ける。

「まだ断定は出来ない。でも複数犯にしては不可解な点があるのよ

「その不可解な点つてのは？」

「殺した相手に政府関係者っていう以外共通点も無いし協力して犯行にあたつたような形跡が無いの。皆自分勝手に殺してる…」

「分かった。そつちの方は拳隆とお前に任せると？」

俺は一旦口ごもつた。本当は嶺崎について言おうとしたのだがそれよりも重要な事があつたからだ。俺の前を走っていたバイクから急に人が飛び出し、路地へと走っていく。このまま逃げ切るつもりだろうがそう簡単に逃げられては困る。俺は無理やりにZ4を路上に停めると巡回に来ていた警官を無視して路地へ走りだした。

霞ヶ関の路地裏にその男の姿はあつた。彼の前にあるのは血にまみれた肉片。路地裏の影に光をかき消され、ビル風に乗つて腐乱臭が鼻腔をくすぐつてくる。

「にしてもひつでえな…」

赤いラーダースジャケットを着た男、拳隆翔。彼は連続して発生した政府関係者の殺害事件の現場のひとつに来ていた。既に犯人は逃亡していてここにあるのは死体だけ、見た感じからして死んでからそんなに経つてはいないと思う。

被害者は法務省の役人。犯人を目撃した者はいなかつたが決定的な証拠があつた。死体の胸の真ん中に刺し傷、そしてそれを囲むように三つ巴の形に傷が出来ていた。服ははだけていて上着とワイシャツを外してから三つ巴を胸に刻んだのだと思われる。にして妙だ。今までこんなことを犯人はしてこなかつた。それが何故突然マークを刻んだり犯行予告を出したりしたのか。

「これは

拳隆は死体の傷を見ているた何かを発見する。血で染まつた体。よく見るとそこに何かが書いてあつた。

『お前の本当の腹底から出たものでなければ、人を心から動かすことは断じてできない。』

「なんだこりや？」

拳隆にはなんなかつた。仕方なくポケットからカメラを取り出して写真に収める。フラッシュをたくと傷が一層鮮明に見えた。

コートを着た鬼はゴミ箱を倒しながらビルの合間を通り抜けていた。銃を撃てば当たる距離だがこんな街中で銃声なんかしたら大事になりかねない。政治的な均衡を保とうと公安が事件を隠していたのが水の泡となる。

サイレンサー付きの銃をわざわざトランクから出している暇だつてない。つまり足で追いかけるしか無いということを示している。G33は既にスライドが引いてありいつでも奴を殺すことが出来た。だが前述通りそういう訳にもいかない。

光の届かないビル影の細い路地を走る。奴はとの距離は狭まつてはいるが問題はスタミナと土地勘という事になる。こんな細く鋸びれた道が俺はあるとは知らなかつたが奴にとつては庭のようなもだという可能性も捨てきれないというわけだ。

ワイヤーガンを撃つ。不法投棄の自転車で邪魔をしようと囁くも奴は刀を引き抜き一筋でそれを切つてみせた。観光に来た外国人が見ればサムライだの二ンジャだと大喜びするような光景だろう。光が差し込む。光の方向にはビルが無く、コンクリートの塀が連なつている。つまりは『行き止まり』といふことだ。

「行き止まりだ、大人しくしろ！」

俺がそう言つて銃を構える。目の前には鬼。刀をもつた鬼がいたはず。そう、いたはずだつたのだ。だが、そこには人の姿すら無い。俺は目を離した覚えは無かつた。もしかして塀の上かと辺りを見回すがそのような人影はおろか人の気配すら無い。

「取り逃がしたか…」

ホルスターにG33を納め、そうつぶやいた。

「予定よりも早くないか？私はお前の言つとおりにした。お前も私の言つことを聞くのがフュアではないか？」

薄暗闇の中、うつすらとしろい顔が映る。声は低く、恐らしく合成されたものだらう。

「ええ、貴方はよくやつてくれたわ」

「では交渉通りにするべきではないのか？お前は急ぎすぎている」女の声と男の声。両者共にボイスチェンジャーか何かで声が細工されてあり本物の声ではない。機械にも似たような声が暗闇に響く。「…分かつてゐるわ。私の指示に従う代わりとして貴方は復讐を果たす。そして私は貴方の手助けをする。そうでしょ？」

「その通りだ。私がこのような茶番を起してゐるのも復讐の為。両者が合理的にならなければそれは正しいネゴシエーションとは言えない。違つか？」

「そうね」

女は一旦口もつたが少しして会話を再会する。

「いいわ、貴方の好きなようにして。代償は彼を殺すことだけよ」そういうと女は白い顔へと近づく。その顔は瞬き一つせず顔色も一切変えない。

「頼んだわよ 鬼武者」

Connect to the next File.

俺たちが目標を取り逃がした翌日。公安から連絡が来た。その内容というのは犯人の目星がついたというのだ。もともとこの事件を捜査していたのは俺たちではなく公安なので別に有り得ない事態でもない。

「さつてーん、その公安が狙つてるひつー容疑者だけど」

課長は公安が送り付けてきた書簡から一枚の写真を取り出す。そこに映っていたのはスース姿の若い男。

「名前は御子沢宗介。内調のエージェントね。はつきし言つて詳しい事は公安が黙りなもんだから教えてくんないけどさーちょっと嫌な感じがすんのよね」

課長は写真を人差し指でトントンと突きながら言つ。

コトン、という音がする。嶺崎が給湯室で入れてきたコーヒーを机に置いていた。俺は熱い内にコーヒーを一口啜る。

「確かにウチに依頼してた癖に急にまるでこいつの扱つてる事件だと言わんばかりの態度ですね…」

大辺がキーボードを叩きながら言つ。

確かに不可解な点は多い。ここまで正確に犯人がわかるのならそもそも俺たちに依頼する必要性はあったのかと。

「でもお書類上はウチ預かってるからまあ一死傷者が出来たら責任取らされるの私な訳なのよ」

すると拳隆が事務椅子から立ち上がりて言つ。

「要はSATの連中がなんとかするまで俺達はSP紛いつてことか

よ

「いやーそれもあるけどお裏に何かありそうなのよね…」

課長の声のトーンはいつもより低かった。やはりこの件は何かあるのだと俺も思った。

「では、俺がその御子沢とやらを

「ええ、そうね」

そつ言つて課長は頷く。

俺は嶺崎の肩をポンと叩くと車のキーをひらつかせて付いて来いと無言で合図を送った。

それにしても引っかかる。

『御子沢』という苗字が引っかかつてならなかつた。

亜久と嶺崎が御子沢宗介の捜査へと向かい、拳隆と大辺が次の被害者を防ぐために国会へ行き誰もいなくなつたオフィスビル。

彼女、加藤沙紀は一人でパソコンの前に呆然と座っていた。ディスプレイには住基ネットや『籍情報等が記載され、名前での検索を行う画面が映されている。

彼女はキーボードを叩き、ある人物の名前を入力する。『御子沢宗介』事件の容疑者の名前を。

間も無くしてディスプレイに表示される彼に関するさまざまな情報

彼女はそれを見てうなだれた。

「何やってんのよ、遙」

一連の事件には統一性があつた。方法は様々だが死体、もしくはその付近に刻まれた三つ巴。そして油性マジックか何かで死体に書きなぐられた言葉。

『お前の本当の腹底から出たものでなければ、人を心から動かすことは断じてできない。』

確かゲーテのファウストで登場した言葉では無かつただろつか。一連の事件の犯人は衣笠に対する侮蔑の意味を込めてこの言葉を残したとしか思えない。

にも関わらず公安は左派である日本新党には全く触れずに何故か内調のエージェントを犯人と決め込んだ訳だ。

SATの突入は22時丁度ということだ。容疑者の自宅アパートの付近には既に私服警官と思われる者が何人か確認できたりしていた。俺たちは突入に介入する権利は持っていない。だから仕方なくアパートから少し離れた所に車を停めて張り込んでるという訳だ。

「全く動きが無いじゃない」

助手席の嶺崎が退屈そうに足を伸ばしながら言った。

「電気は点いているから御子沢は恐らくいるんだろうが……」

俺はハンドルを人差指でトントンと叩きながら前かがみにアパートを見ていた。私服警官は3人そこらだろうか。

「にしても私、こいつが犯人だなんて思えないんだけどさ」

それは俺も同意出来る。俺は明かりを点け、御子沢に関する資料に再び目を通す。まだ内調に入つてから一年そこらの新人。若氣の至りでこんなだいそれた殺人事件を犯すとは思えないし、ある種腐敗した政治への正義感からの行動ということもあるかもしれないが5年前の擬似クーデター事件の藤見署副署長のような正義感を持ち合わせたようには見えない。

それに複数犯としか考えられないというのに何故彼だけが逮捕となるのも意味が分からなかつた。

「模倣犯ってことなのかな……」

嶺崎がそう呟く。

「公安がひた隠しにした事件を模倣できるとなると一部政府関係者しかいないだろ?」

「そうだけど……やっぱリアイツが犯人なのかな? 内調なら情報がらいは」

「どうしても模倣した意図が全くつかめないがな」

俺はそう言って体を起こし、シートに身を委ねた。

「二人とも、SATが突入を早めるらしいわ」

無線機から大辺の声が響いた。

「了解した。そつちはどうだ？」

「さつき三つ巴の記されたカードが一枚見つかったわ。議員が狙われる可能性が高い」

そうなるとやはり複数犯なのだと俺は再度確認する。どの犯行も単独犯を匂わせる行動ばかりだがここまで来ては単独ではできないだろ。

「わかった、気をつけろよ

「そつちもね」

大辺からの通信から10分も経たないうちにS A Tは動き出した。精密機器メーカーの輸送トラックが道路で急に停車したかと思うと荷台のハッチが開かれ、BDUと防弾ベストに身を包んだ者達が出てくる。つまりこのトラックは偽装車両ということ。S A Tの隊員たちはダッシュサイトとレーザーエイミングモジュール、サイレンサ一の装備されたMP5-Jをその手に握んでいる。

ぞろぞろと、かつ俊敏に取り囲むように御子沢のアパートを囲んでいくS A T。よほど公安も焦っているのだろうと窺える。

「……にしても早いな」

俺はホルスターのG33に手を掛けながら言った。それは嶺崎も承知していることだろう。

「嶺崎？」

俺は嶺崎の座っている助手席の方を振り向く。すると彼女は振り子を取り出して地図に向かって垂らしていた。振り子の先端は鋭い十字架になっていて如何にもオカルトという臭いを漂わせている。

「どうした、何かわかったか？」

「シッ！」

嶺崎がやけに強い口調でそう言った。依然として彼女は顔色を変えず眉間にシワを寄せたまま地図と睨めっこをしている。

対してS A Tは既に部屋への突入を開始しようとしていた。既に住

民の退去は上の方がやつたらしく随分と荒い手口を使つてゐる。いくら重犯罪の容疑者といえど民家にバッティングドラムを使ってドアをぶち壊して突入するなんてマスコミにバレたら責任を問われる事になるだらう。どちらにしろ情報統制で伝わらないのだろうが。

「マズイわ」

嶺崎が途端に表情を変えた。先程までの集中よりも不安を感じる事ができる。

「何が分かつた？」

「……アイツ、逃げるわ」

嶺崎がそう言つと同時に隣を黒い乗用車が通り抜けた。先程から何台か車とすれ違つたがそれとは違う奇妙な感覚が全身を包むかのように広がつた。

「亜久さん、あの車！」

「間違つてたら責任はお前がどれよ」

アクセルを踏み込む。ハンドルを一気に回転させて180°。回転するとそのままギアを上げる。

「間違いないわ。ダウジングが間違つてたとしても私見た。あの車に帽子を深く被つてサングラスをした男が乗つてたところを」

「確かにそれは怪しいな」

距離を詰める。だが法定速度など奴には関係は無く夜中といえど交通量のある都会の住宅街を通り抜けていく。恐らく100km近く出しているのではないか。

「クソッ、銃を使いたいところだが」

下手に住宅街で撃つわけにもいかない。なんだつたらS A Tが住民退去をさせていた地域でさつさとタイヤでも撃つておけば良かつたと後悔する。

人気の無い道へと入る。交通量がだいぶ減つたせいか向こうは大分飛ばしている。

「……嶺崎、運転代れるか？」

シートに押し付けられ、小さくなつてゐる嶺崎に俺は尋ねる。

「運転つて……私まだ免許とつてないよ、自動車学校に通つてるとこみよ？」

「仮免か。無いよりマシだ」

そう言つうと俺はスイッチを押してハードトップを開ける。冷たい風が一気に車内へ入り込んだ。

「ちょっと、何してるのよ！」

「奴を捕まえるんだ。お前は運転を代われ！」

無理やりに嶺崎の服を引っ張り運転席へと座らせる。対する俺は100km以上で走行する車の外へと上半身を投げ出す。

「いいか、下手にブレーキやハンドルを切るなよ！」

「分かつてゐるわよ

銃を構える。移動している上に風に煽られる。勿論照準器は俺の思つた通りの所へなかなか向かない。向こうもこちらの動きに気づいたのか蛇行運転を開始している。狙つている間にも難度は増していくということだ。

クソッと心の中で叫ぶ。車体に撃つても特にダメージにはならない。ましてや俺の持つている銃はハンドガンだ。長物ならまだしもタイヤに撃つ以外方法は無い。

「亜久さん、まだなの！？」

「もう少しだ！」

投げやりに叫ぶように俺は応え、もう一度照準器に神経を集中させる。リアサイトがタイヤを捉えるもフロントサイトが合わない。

夜間用に照準器に螢光色で塗られたダットが光る。その光がタイヤを抑える。

バンッ、銃声が響く。でも俺には風が強すぎて音なんて聞こえやしなかった。

亜久と嶺崎が御子沢宗介を追いかけ始める數十分前。拳隆翔と大辺未来は国会議事堂にいた。

他愛もない党首討論の行われる会議。例え今が水面下の対立の真つただ中といえどここで大きなことをしでかす政治家はいない。先に動いたほうが負けという言葉がここには適応されている。

全ては今衣笠の手中であり。それを開放せんとする動きもどうにもやりづらいという訳だ。

野次の飛び交う議会。その茶番を拳隆はBGMのように耳から耳へと受け流していく。よりかかった壁が少し振動していた。

この国は外見上は理想的な民主国家だが本当は究極的な独裁国家だ。
「本音と建前は別腹つてか」

拳隆はそうつぶやきながら皮肉なもんだなと思った。

腕時計を見る。先程鬼武者からのメッセージと思われるカードが見つかり、大辺はそれについて連絡するために席を外している。

今彼の隣にいるのは厳つい顔をしたSPや警備員。姿勢を崩して壁によつかかっている彼とは対照的に背筋を伸ばして辺りへ注意を振りまいっている。

全くご苦労なことだと彼は内心呟いてもう一度時計を見る。犯行予告と思われるメッセージが届いてから10分が経過しようとしている。

ふあーっとあくびをして背筋でも伸ばそうかとした途端に大辺が廊下を歩いてくる。それを確認した拳隆はそそくさと姿勢を元に戻した。周りの警備員たちから降り注がれる視線に彼は笑顔で受け答えた。

「んで、亜久の方はどうだつたつて？」

「まだ動きは無いらしいわ」

カタカタと階段の手すりの部分に押し付けるようにして置いた小型のノートパソコンのキーボードを叩く。ディスプレイには小さいながらも容疑者のデータやら国会議事堂の各所に設置された監視カメラの映像が映し出されてる。一体どこからそんなもの引っ張り出し

ているのかと突つ込みたくなる衝動を堪えて拳隆は大辺に問つ。

「犯人と思しき人物は？」

「一応警察に検問させてるし監視カメラから戸籍割り出したりして探してるけどどうにもね……」

大辺は笑いかけながら両手を上げてもうおてあげだとやつてみせた。
「でもやっぱりこんな物まで来てんだから何か起きたのは

「確實ね」

そう言つと大辺は三つ巴のプリントされたカードを右手で持つた。

彼女の手は一応白い鑑識とかが付けている手袋をはめている。

「でも何かメッセージのような物は無し。書いてあるのは三つ巴だけ

」

拳隆は頭を搔く。

「……今は地道にやるしかないと想ね」

そう言つと大辺は再びキーボードへと顔を向けた。

弾丸をタイヤに打ち込まれた車は途端にバランスを崩し、街路樹へと衝突した。衝撃によりボンネットは開き、フロントガラスはまだ綺麗だつたがミラー や ライトはぐれやぐれやに碎け無残な姿になつていた。

嶺崎はブレーキを踏み、御子沢の物と思われる車に横付けする形で停車する。俺はドアも開けずに無理矢理飛び越えて車から降りると構えていたハンドガンをそのまま運転手へと向けジリジリと近づいた。

運転手は嶺崎が言つていたように黒い帽子にサングラスという如何にもば出で立ちである。俺は地面へと倒れた男に押し付けるように銃を突き立てた。そして左手で無理やりに帽子とサングラスを外す。向こうは抵抗をせず諦めてようにしていてそれは造作も無かつた。予想通り覆面の下は御子沢宗介だつた。

「お前が連續殺人事件の犯人か？」

御子沢は反応しない。目を見開いたまま瞬きもせずに横たわつてい

る。俺は嫌な予感がしてコートのポケットから小型のLEDライトを取り出すとその光を御子沢の目に当ててみせる。

「死んでるだと……」

案の定、瞳孔は開いていなかつた。脈も一応確認したが動いていない。完全に死んでいる。

にしても妙だ。先程の衝突で死んだとしても外傷が全く見当たらぬ。むしろ事故死というよりも薬物による自殺という方が信憑性があるというほどだ。

「あっ、亜久さん！」

嶺崎が車の後ろの方で俺を呼ぶ。彼女は車のトランクを開けて中身を確認していた。

「これは」

「やっぱりこの人が犯人なのかな……」

トランクに入っていたのは大きめのキャリーケース。そしてその中を開けるとノートパソコンやスーツといったビジネス用品が詰め込まれている。だがその下に隠されるように鬼の面と真剣が入つていた。

しかし気がかりな点は俺が見た鬼武者と持っている刀が微妙に異なつているという点である。俺が見たのは鍔の無い木製の鞘の日本刀だがこれには鍔が付いていてよく時代劇とかで侍とかが持つている日本刀だった。

複数犯という事は分かつていた。しかしながら突然の謎の死といいS A Tの間抜けな不手際といい。この事件にはまだまだ調べるべきことが散在していた。

その報せは唐突に届いた。しかし一人はそれよりも前に察知していた。

犯人が狙うとすれば首相を始め、各党のトップが出席しているこの事件に関する特別委員会だと思っていた。それが妥当な考えだろう。

犯人の左翼的な行動や政府との繋がりもあると思われる行動を鑑みれば隙を突いて首相を狙うのがベストなのでは無いかと思っていた。

「……未来ちゃん、231番カメラを拡大して」

監視カメラの映像が映し出された大辺のパソコンをのぞき込むように見ている拳隆が唐突にそう言った。

大辺はそれに対して何も言わずにキーボードを叩き、指定された番号のカメラを拡大して見せる。しかし映像を拡大した途端に大辺は声を漏らした。

いたのだ。公安が隠していた連続殺人犯が。大辺は急いでキーボードを叩く。途中焦つて間違えたりするもから録画しているデータのバックアップをハードディスクとUSBメモリーに二つと念入りに作るとUSBを抜いてパソコンをたたむ。

「未来ちゃん、あのカメラってどこの映像？」

拳隆は手すりから離れながらそう言つ。

「これは 議員会館や首相官邸を繋ぐ地下通路ね。一般には公開されて無いと思うんだけど……」

「おいおい何でそんなとこにいるんだ？」

拳隆は愚痴を言いながら赤いアタッシュケース引っ張り出すとそれを蹴るようにして開ける。その中には黒光りした物が一つ。一般的にはサブマシンガンと言つた方が伝わるのだろうが正式にこの銃の名前は9mm機関けん銃。短機関銃の一種だが名称は機関けん銃である。エムナインという愛称の日本製短機関銃だ。

拳隆はそのエムナインを掴み、スリングを肩へとかけるとジニエやイングラムと同じJ型ボルトを引き、初発を装填させた。

地下通路には足音が反響していた。他には何の音もしていない。人も誰もいなく利用しているものも余りいないのではないかと窺える。

しかしその通路のど真ん中に亞な物があつた。『死体』だ。

胸を突き刺された死体はワイシャツを脱がされ、胸に三つ巴の傷が記されている。それと一緒にカードが置かれていた。小さな白いカードに書かれたのはやはりゲーテの言葉だった。

『人間が真に悪くなると、人を傷つけて喜ぶことのほかに興味を持たなくなる。』

格言と反省で登場する言葉だ。そしてそれを見て誰かがフツと鼻で笑つた。そう、鬼の仮面をした誰かが。

鬼武者が一人。正確に死体もその中に加算するかどうかは置いておくが彼が佇んでいた地下通路に足音が響いた。ガランとした地下通路というのは音の反響が凄まじいもので階段を降りる音の一段一段が彼の耳に明確に聞こえていた。

それから数秒して一人の銃をもつた男と女が鬼武者の方へそれを構えて降りてきた。対する彼は血がべつとりとついた刀を振り払うようにして血液を飛ばすと鞘には仕舞わず下に向けた。

銃を構える金属音がエコーのように反響して地下通路にこだます。

「お前がやつたのか？」

エムナインを構えた拳隆が言つた。しかし鬼武者は答える事も無くただじつと見つめていた。仮面の下に隠れた眼球はどこか一点を見つめている。

「……話すつもりはねえってか！？」

2・3秒。銃声が鳴り響いた。それと同時に鬼は特徴的なマントのような白いコートを翻してみせる。

ブツツ、ブツツという鈍い音と反響した銃声が奥へと響いていく。議員会館から国会へ行こうとしていた議員がこちらの様子を見て逃げ出したのが見える。

銃声が鳴り止んで銃口からは煙とガンパウダーの香りが立ち込める。拳隆はエムナインをそのまま、大辺は護身用のコルトガバメントを

ゆっくり腰のホルスターにしまおうとする。しかしそのカラシカラ
ンと乾いた音が響いた。

エムナインから打ち出された9mm弾はまるでテープにでもへばり
付いたかのように彼のコートに引っ付いていて彼がコートをもう一
度翻した途端に弾丸は舗装された地下通路へと落ちたのだ。

「嘘……あれって軍用の衝撃吸収素材……」

大辺が言葉をこぼした途端、鬼は急に背を向けて走り出す。

「クソッ、未来ちゃんはここにいろよ！」

拳隆はそう言うとスリングを掛けたエムナインから手を離し、両手
を振つて走り始める。

あの素材。大辺には心当たりがあつた。実際にハウンドドッグでも
使つたことがあつたからだ。

今から5年前の擬似クーデター事件。その際に亜久がインナースー
ツとして着用したモノと同じ素材、もしくはその発展形が
大辺は崩れるようにして床に座り込んだ。

「クソッ、どこ行きやがった……」

地下通路は終わりを告げ、議員会館への出口まで来てしまつていた。
既に鬼の姿は見当たらずどこにいるかなんて検討すらつかない。
エムナインのスリングを肩から外し、床へと落とす。「コン」とい
う音が奥へ奥へと響いていった後にもう一つの音が聞こえた。足音
だ。

拳隆はホルスターから大辺の持つていたモノと同じガバメントを引
き抜こうとする。

「あーもう、あたしよ。あたし」

拳隆はその声を聞いてガバメントを引き抜くのをやめる。

「で、その調子だと逃がしちゃったのね？」

「こりゃ失礼」

先ほどとは打つて変わつておちゃらけた表情で頭を搔く。

「まあいいわ。さつき亜久との連絡もとれたし」

そう言つて大辺はポケットから白い携帯電話を取り出してみせる。

「んで、なんだって？」

「取り敢えずわかつてるのは容疑者は死んだつてこと」

「死んだ？」

「そつ、死んだ」

大辺は敢えてにこやかな表情をしてそう言つ。

「どうやらS A Tがへまして亜久と嶺崎ちやんが取り押さえる始末になつたんだけど」

「誰かに殺された？」

「その線が怪しそうね。逃走中に街路樹にぶつかつた後死亡」を確認したらしいけど田立つた外傷はどこにも無し。詳しい事は検死に回してみないとわかんないけどね」

ふーんと拳隆はつまらなさうに相槌を打つ。自分が逃がしてしまつたというのが相当気に入らないんだろう。すると今度は拳隆の携帯が鳴つた。亜久からだ。

「もしもし？」

「拳隆、容疑者は捕まえたか？」

「いんやー……それが」

あははと笑つてごまかすも亜久の大辺にすら聞こえる程の大きなため息の後仕方なく白状する。

「ではエムナインの弾丸は？」

「は？」

予想もしなかつた質問に拳隆はたじろぐ。

「エムナインの弾は着弾したのか？」

「いや、なんでそんな事を……」

そういうと亜久はまたも大きなため息をつく。

「大辺から聞いてなかつたか？ エムナインの弾丸の一部に発信器を取り付けた筈なのだが

「

拳隆はジロリと大辺を睨む。すると大辺は無言で手を合わせて「メンゴメン」とやつている。

今度は拳隆が大きなため息をついた。

薄暗い路地裏にその男は座り込んでいた。
まるで飢えた浮浪者のようにぐつたりと。まるで死んだようにぐつたりと。

でも彼は肉体的には何の疲労感も感じていない。鮮烈な精神的疲労感が仮想的な肉体的疲労感を生み出しているだけだ。

彼は問う。自分自身に。

『これは正しいのか?』と

そして答える。

『これは正義だ。』と

フェンス越しに通つていいく終電が耳を引き裂くような轟音を立てる。
一瞬だけ暗黒の世界が人工の光に照らされる。それも束の間、闇は再び訪れる。

都会の空は暗い。空気は淀み、空は低い。

『汚い』

彼はそう呟いた。それが何に、誰に対するものなのか。いや、全てに対するもののかは分からない。

ただ汚い。汚らわしい存在だった。

地面に仰向けになつて空を見る。死んだ人間のように倒れる。

『……僕は正しいんだね?』

彼はもう一度確認すると田を瞑つた。そうすれば汚れと隔絶できる気がした。

n
t
o
f
g
o
o
d
w
i
l
?
W
h
e
r
e
i
s
t
h
e
b
r
u

朝方。彼女は旧友の元へと向かっていた。その手にはたんまりと書類を持ついつもとは違った雰囲気を醸しながら。

「委員長、お客様が」

「密? こんな時間に?」

御子沢遙は書類の山に埋もれながら問う。

「ええ、その……ハウンドドッグと申していますが……」
その言葉を聞いて御子沢の表情は少しだけ引きつった。嫌な相手に遭遇した時のような顔をあからさまにしてみせた。

「いいわ、通して」

御子沢がそう言つと秘書の女性が一旦外へである。

ため息を着き数秒だけ目を瞑つた。目を抑えると疲れているのか変な音が鳴る。

そんな事をしてるとギィッと木製の重いドアが開いた。そこに居たのはかつての友である加藤沙紀。今では所属も何もかも違っているがよく食事に行く昔からの親友だつた。

「遙、どうしたのよ。最近のあなたちょっとおかしいわよ」

沙紀が何時になく真剣だという事は御子沢は直ぐに把握出来た。

「何? 頼りないS.A.Tを従える無能な国家公安委員長に同情しにきたのかしら?」

御子沢はあからさまな作り笑いと共にそう言つてのけた。しかし加藤の表情も物腰も変わることは無かつた。

「確かにこの事件は何か不可思議ね。でもそれは犯人だけじゃないと思うのよ」

加藤はゆっくりとファイルから資料を取り出しながら御子沢の座る机へと近づく。

「遙、新しくてた被害者が何者なのか知ってる？」

「……嫌でも知ってるわよ。渋沢が殺されたんでしょう？ 左派のリーダーが

今、国政は二分しつつある。衣笠に反抗する左派のリーダー。今までどちらかというと衣笠方の人間が殺されていた。だから加藤は左派の犯行を睨んでいた。だがしかしここで左翼のトップが殺されたとなるとどうにもそれは説明できなくなる。

「ねえ、遙。あなたは犯人をどう思つてる？」

「どうつて……」

言葉が詰まる。犯人に関することは一切分かつていなし。単独犯か複数犯か。それとも単なる模倣犯なのか。やつと捕まえた尻尾も所詮はトカゲの尻尾切りだつた。

「私はね、どうにも左翼の中でも対立があるようにしか思えないのよ」

「……渋沢がトップというのが気に入らない奴がいた。」

「ええ、そうなるわね」

加藤はそう言って被害者と犯行現場の資料を御子沢の机に置くと近くにあつた応接用のソファーに座る。黒いソファーは彼女の体を優しく包みこむが彼女の硬い表情は揺るがなかつた。

「それで沙紀、私に推理を言う為にここにきたの？」

「推理も、よ」

そう言うと加藤は財布を取り出す。

「久々に一人で話したいの。あの時の店で」

御子沢は深くため息をついた後、「わかつたわ」と応えた。

そこは小さな定食屋だった。内閣の一人が入つていいくようには見えない小さな下町の昔ながらのお店という感じだ。

スマーケガラスの引き戸を開けるとガラガラという音が鳴り奥からは氣前のいい店主の声が聽こえる。

加藤と御子沢はカウンター席の一一番奥に腰掛けた。ここが昔から彼女達の指定席なのだ。

「……懐かしいわね」

御子沢はそれだけ言うと口を閉じ、茶色いグラスに注がれた水を口に運ぶ。

「ねえ、もういい加減にしたらどう?」

「なにが?」

「御子沢宗介。遙、貴方は何をしたいの?」

御子沢は黙った。その間に加藤は店主の男に生姜焼き定食を注文した。

店はガランとしていて客の人はほとんど無かった。一人だけ常連と思わしき老人がいたが焼き魚をメインとした和風の定食料理食べて直ぐ様帰ってしまった。

御子沢は小声で老人が食べていたものと同じ口替わり定食を注文する。

「私の知ったことじゃないわよ……」

彼女は小さな声でそう言った。それに対しても加藤はため息を着き、水を飲む。

「私、あんたに息子がいるなんてちっとも聞いてなかつたわ」

「ええ、聞かれなかつたから」

御子沢がそう言った途端、加藤は机を叩いた。店主が驚いて振り向いたので加藤は彼に向かつて両手を合わせ頭を下げた。

「……彼の車の中から鬼の面と刀が見つかつたわ」

「ええ、既に報告を聞いてるわ」

「でも彼は死んでしまつた。突然に」

「あなたたちが殺つたんじゃないの?」

すると再び加藤の顔が引き釣つた。

「悪いけど、遙。貴方が私たちを疑つてゐるよつに私も貴方を疑つてゐるわ。」

「そりやそうね。犯人逃がすし、容疑者の親だし。疑われても弁解

の余地は無いわね。でも貴方達だって一度も逃がしてる。しかも追い込んだ状況で」

「……奴は特殊部隊用の防弾素材で出来た服を着てた。内通者がいる」

「そう考えるのが妥当ね」

「トン、と音が鳴る。グラスを置いたその音の後、店主の声が響き黒いトレイに乗った定食が一つ彼女たちの前に差し出される。加藤はそれをにこやかに笑いながら受け取る。対する御子沢は相変わらずの仏頂面で自分の下へトレイを引き寄せた。

「私ね、この事件には裏で操ってる主犯がいると思うのよ」

「まあ、有り得なくも無いわね」

「ええ、それでさ」

すると加藤は箸を止めた。そして御子沢の顔を見る。

「遙が主犯だつたら何の為にこうした殺人をやらせると思つ?」

彼女は真剣な顔のままでそう言つ。するとそれがおかしかったのか御子沢は魚を開いていた箸を思わず床に落として笑い始めた。

「何言つてるのよ沙紀、そんなの」

「真面目に聞いてるの。」

「……そうね」

御子沢は圧倒された、加藤の真剣な顔に。彼女は落とした割り箸を机の端に置くと新しく割り箸を折つて魚を口に運び始める。

「そうね、私なら」

水を一口飲む。「ゴクリ」という音がして乾いた喉を潤していく。

「やっぱり政府転覆としか考えられないかな……って、国家公安委員長が何言つてるんだか」

御子沢はそう言つてもう一度箸を動かし始めた。そして加藤も表情が心無しかいつも通りになつた気がした。

都内の某オフィスビル。ハウンドドッグの事務所のようなこのビルで俺は「コーヒー」を片手に鬼武者に関するプロファイリングを見ていた。

不可思議だと思つてゐるのは御子沢宗介の件。まだ死亡鑑定に回している最中なので詳しいことはよくわからないが俺はもう他殺とか考えられなくなつていた。

そしてもう一つの不可思議な点は左翼のトップであつた日本新党の渋沢達雄が最新の被害者であつたこと。これによつて政界は右派、つまりは衣笠陣営に好転した。今まで左翼を匂わせるような行動をしてきた癖に何を血迷つたかということだ。

ガチャーンと扉の閉まる音が部屋の中に響いた。

「……やっぱりわからないわね」

大辺が束になつたプリントを持つて自分の机へと向かうと机にそれをすつと置いた。

「……なあ、渋沢を殺害した奴と他の鬼武者は同一犯なのだろうか？御子沢をダミーとして使おうとするが模倣犯が誤つてその最中に犯行を起こした……無理矢理か」

「そうね、覆面だし声も出さないしだらわかつてるのは彼は特殊部隊用の防弾素材で出来た服を着てたつてこと」

「となるとさらに政府関係者の犯行があやしくなるな……」

だが、一連の犯行に今まで同一性があつたもののそれが急に消え失せた。これを説明する手立ては今の俺には無い。

俺は資料を事務机の上に置き、「コーヒー」を飲み終えたカップも右手の近くへと置いた。カップの中はほんのり茶色く染まつている。

「模倣犯か」

大辺は言葉を濁す。俺にはその言葉の続きが気掛かりで机を中指でトントンと叩きながら「何か知つてゐるのか？」と聞いた。

「実はね、鬼武者の犯行と思われる事件が殺人に留まらず増え続けている。それも誰の犯行なのか分からぬ。まるで何かのブームのように犯罪が行われてる。」

「それが模倣犯ってか」

頬杖を突く。机に置かれたモダンなデジタル時計は暖房の聞いた室内の温度と時刻を指し示す。

「それにまた言葉が残されてたしね」

「なんと書かれていた？」

『人間が真に悪くなると、人を傷つけて喜ぶことのほかに興味を持たなくなる。』大辺はそう書かれたカードを撮った写真を見せる。カードは死体の横に血に濡れながら置かれていた。

「またゲーテか……」

格言と反省。奴は何を考えているのか。

この言葉は誰に対した物なのか。政府への批判かそれとも自分に対する卑下か。恐らくは前者だろうが。

何故ゲーテなのか。これが何かのメッセージという事は間違いない。俺は昔読んだゲーテの本を思い出そうとするもゲーテなんて大して読んだことも無かった。

大辺に続いて拳隆と嶺崎がオフィスビルへと戻ってきた。二人は先日の渋沢達雄の殺害現場へ向かい、現場検証を行なっている警察にお邪魔して何か掴めればと思っていたが結局収穫は無かつた。

わかつてるのは鬼武者による犯行ということ。ゲーテの言葉が残され、胸には三つ巴が刻まれているということ。そして奴は政府関係者の可能性が高いということ。それだけだ。

捜査の進展の無さは結構なもので既に公安から催促のお達しが来ている。S A Tが逃がしたくせに何を言っていると思うがそもそも今対立下の状況では俺たちを気に入らない連中もいる。そういう連中にとつては事件を解決することが俺たちの存在意義だということだ。

暖房の音がビルの中に響く。様々な機械の動く音だけがこの空間を満たしている。

「なにこれ」

大辺がキーボードを叩く手を動かし口を抑えた。表示されているのは文字列。その数は尋常ではなく専門外の俺たちにはさっぱり分からぬ。

「何があつた？」

「……何処からアタックされてる！」

サーバーがエラーを起こし、悲鳴を上げる。文字列はさらに増加し、勝手にウインドウを開き始める。

「ちょっと、どうなつてるのよ……」

大辺は必死にキーボードを叩くが肝心のパソコンは何の反応も起さず黙りを決め込んでいる。

「信号を受け付けてない……データが盗まれる前に回線を落として！そこのケーブルを切るの！」

俺よりも先に拳隆が気づく。嶺崎は何か分からずその場であたふたしている。

床のカーペットをじけ、金属製の板を開けた中に多数のケーブルが詰まっている。

「どのケーブルだ？」

「奥の一番太い奴！」

ケーブルをかき分ける。黒いケーブルに赤いもの、青いもの。まるで爆弾の中身のような中に一本の太いケーブルを見つけ出す。

拳隆はポケットからナイフを取り出そうとする。しかしジーパンのポケットという奴はなかなか取り出しづらい。

「早くして！データが盗まる！」

「分かつて」と拳隆は言うがそのまま文字列は増え続ける。画面を見ていた俺も流石にどうしようないとケーブルの方へと行く。

「どけ」

俺はそう言つとハンドガンを引き抜き、銃口をケーブルに押し当てる。

引き金を引く。銃声と共にケーブルが引き裂かれる。途端、パソコ

ンの電源は切れオフィスビル全体が真っ暗になった。

暗くなつたビルの中に光が直接差し込み始めた。窓ガラスが割れたのだ。銃声と共に割れていくガラス、その間に日光ともう一つの光が差し込む。

「どうしたことだ、何が起きてる？」

「分からぬわよ！」

大辺は机の下に身を隠し、護身用の銃を机の引き出しから手探しで取り出す。拳隆は嶺崎を覆うように床に倒れていた。

銃声が止む。俺はおそるおそる窓から外をのぞき込んだ。その下、路地には黒いタクティカルベストとM P 5 Jと決め込んだフル装備のS A Tが待ち構えている。彼らは俺が見えた途端、トリガーを引き銃弾を発射する。咄嗟に俺も身を隠すが頬を少し掠つた。

「S A Tだ。S A Tの連中がここを取り囲んでる」

「何でS A Tの連中が？」

拳隆が言いかけた途端、ビルの中に爆音と共に衝撃が響いた。体が縦に揺れ天井からは破片と埃が落ちてくる。

「分からぬが、逃げるしかないな」

俺はそう言つと銃を引き抜き右手で持つ。そして左手にはワイヤーガンを持った。

課長が居ない今、ハウンドドッグの指揮系統は俺に委譲された事になる。これで誰かが死んだら俺の責任ということだ。無論そんな責任は御免被りたい。

「いいか、各自の判断で脱出しき。突破口は俺がある程度開いてお壁際へと移動する。
「木製のハンガーに掛かつた黒いコートを取る。袖を通しながら俺はトリガーを引く。ワイヤーが隣のビルへと射出され、高性能接着剤

「……合流地点は追つて連絡する、それまで生きていろ！」

拳隆が言いかけた途端、ビルの中に爆音と共に衝撃が響いた。体が

が衝撃に反応してコンクリートに接着した。もう一度トリガーを引く。機械音と共に巻き取りが開始され、俺は窓のサッシを蹴つて外へとだた。

その途端、俺の体は空中で無防備となつた。いや、そう見えたのはS A Tの連中だけだろう。

空を駆け抜ける中、鉛が俺に向かつて放たれる。俺もグロックから銃弾を発射するが5階から一階で移動しながら撃つているとなると連射の効くM P 5の方が圧倒的に有利である。しかしそれは彼らからの主観的な考え方であつて彼らには俺が特殊素材の衣服を身に付けてるとは思いもしなかつただろう。

あの鬼武者が着ていたモノと同じ。皮肉だが彼も俺もS A Tから追われる特殊生地の「コート」を来た殺人者ということまで一致している。向こうのビルに足が着く。その途端に俺はもう一度トリガーを引いてワイヤー伸ばす。降下していく。

弾丸を振り払いながら、生きていた人間を肉塊に変えながら。

追つ手を振り切つた俺は少しでも見つかれないようになると人ごみの方へ行こうとした。新宿やら渋谷に行けばある程度時間稼ぎにはなるだろう。

出来るだけ人と接触したくなかったので電車は使わなかつた。かといつて車を取りに行くような暇はあの時なかつたし検問を行なつている可能性だつて十分にあつた。つまり俺は徒步で来たわけだが何故そこまで慎重に行動しているのか。その理由は渋谷のスクランブル交差点で一際目立つてゐるあの巨大なディスプレイを見ればわかるだろう。

映し出されているのは政治のニュース。そしてその内容というのは衣笠の悪行について辛辣に語つたものだつた。ある事無い事マスクミはわめきたててゐる。それはつまり俺たちの存在も世間に露呈したものでそれもトップニュースに上がつてゐた。

汚職を揉み消すための最低の組織。随分な言われようだと思いながら信号が青に変わった交差点を歩く。

道行く人、ひとりひとりが追っ手のように見えた。それほどのプレッシャーというか何とも言えない威圧感をかんじる。気のせいなど、気にしそぎなんだとは思う。けれども世間からすれば俺達は今最低最悪の社会悪に過ぎない。

ついさっきまで連續殺人犯を追っていた男は今、最低の犬として、殺人鬼として晒されている。

青信号が点滅する。俺は早足で横断歩道を渡った。

『若きウェルテルの悩みって知ってる?』

その言葉を聞いたのはいつだつたろうか。

彼は懐古する。

若きウェルテルの悩み。ゲーテによつて書かれたその本は当時ヨーロッパでベストセラーとなり、そして多くの人を殺した。人間の心というのは動かしやすい。この本で青年ウェルテルは叶わぬ恋に絶望し、自害する。

これを読んだ者達はそれを真似、自害した。

ウェルテル効果。という言葉がある。これはある著名人の死が他者に影響、伝達し自殺させるというものだ。

彼はゲーテになりたかった。彼の正義を伝達させたかった。だが彼女のやり方は擬似的な模倣犯の創造に過ぎなかつた。彼は絶望し、そして苦悩した。

he
post-
breakup

雨が降り始めた。俺は取り敢えず近くの路地裏に身を潜め小さな古ぼけた屋根で雨を凌ぐ。この時間帯の雨だから夕立だろ。すぐ晴れるとは思うがここで雨宿りしてる所でS A Tにみつかったらどうしようもない。

そもそも何故俺達は追われる身になつたのだ？衣笠のやつてきた事が世間に露呈した。それは分かる。しかし、なぜそれがマスクミの目に触れたのかがわからなかつた。ただ一つわかるのは、この政治家たちの争いは左へ傾いたということだ。

携帯電話の電源を切る。うかつに通話して位置がバレたらどうしうもないしG P S機能で発見されることだって十分にありえるからだ。しかしながらそうした場合散り散りになつたメンバーとはばつやつて連絡を取ればいいということになる。

ふと、俺はコートを見やつた。濡れたコートを手で適当に払うとポケットの中で何か凹凸のような物を感じた。もしやと思いポケットを探ると案の定無線機をいたままにしていた。

これは好都合だと俺はコートの襟元にマイクを取り付けワイヤレス式のカナルイヤホンを耳へと引っ掛けた。小さなボタンを押すと青いランプが光り、電源が入つたことを知らせる。

しかし聞こえてくるのはノイズだけで以降、俺が問いかけても何かしらの反応を見せる事とは無かつた。

拳隆はS A Tに襲われる中、嶺崎を連れて脱出していた。何発か銃弾を受けたがどれも致命傷という程ではなく適当に布を当てておけば彼にとつては大したことは無かつた。

ザアツという音と共に雨粒が地面へと落ちていく。一人は人ごみの多い土地というよりもこの時間はあまり人のいない飲み屋街を歩いていた。ここへときたのは勿論拳隆の采配である。

「拳隆さん、ここでどうするつもりなんですか？」

嶺崎が問う。街はガランとしており雨の音がガンガンと頭に響きわたる。

「着いたよ」

そういうと拳隆は小さな古ぼけた店の前に立つた。扉は年季の入った木製で酔った親父が蹴飛ばした跡が残つてたりする。

拳隆はその扉を開ける。カラシコロンと乾いたベルの音がして二人はに入る。

「マスター、ちょっと身を隠させてもらひづせ」

彼はカウンターに立つ年老いた男にそう言つた。

「ほう、珍しく来たと思つたら女連れかい。ずいぶん成長したもんだねえ」

「同僚だつつの。取り敢えず水を」

「あいよ」

店主がそういうつてボトルに入った水を拳隆に手渡すと彼は奥の席へと向かつた。奥には一人の男が新聞紙を持ってコーヒーを飲んでいる。スピーカーからは70年代アメリカの懐かしいポップスが流れているにも関わらずその男はイヤホンを耳にしてラジオを聞いている。

「久しぶりだな、翔」

男はそう言つた。初老ぐらいの男はイヤホンを外し、ポータブルラジオの主電源へ手をかける。

「あんたなら何か知つてると思ってな」

「ふむ、しかしながら翔。それよりも彼女はいいのか？」

男は立つたままあたふたしている嶺崎を顎で指し示す。

「いいのさ、それより何か知ってるのか？」

「いや、俺が知っているのは公安に何か黒い繋がりがあるってことさ」「はっ、あんたも相変わらず素直じゃないね」

拳隆はそう言うと水を飲み、財布からいくらかの金を取り出すとそれを男の座る机へと置いた。

雨足は弱くなる気配は無かつた。曇天の空は太陽を隠し、雪が降るか振らないかの境界線の冷たさの風が吹く。俺は雨宿りはやめた。傘を刺した人々をかき分けて横断歩道を歩く。どこまで行くか、どこへ行くか。そんな物は決めてなかつた。永遠に終わりのない道を自分の足で歩くだけ。追つ手が見当たらないのが不幸中の幸いといったところだろうか。

ぽつり。俺の前髪からコートへと雨が垂れる。特殊素材で出来たコートは材質上水を弾くらしく雨粒は形を保つたまま地面へと落ちた。景色が都市部から住宅街へと変わっていく。道には緑が増えてきて俺の目の前に大きな橋が現れた。橋の下の川は雨の影響かやけに水かさが多く、濁つた水の臭いが橋の手前に居た俺の鼻腔をもぐすぐつた。

俺は橋を渡ろうかと戸惑つたが結局右折して河川敷を歩くことにした。緑地には濡れたダンボールが点在していて体の汚れた浮浪者達が雨で体を洗っていた。社会の底辺と呼ばれる彼等だが実際はどうなのだろうか。俺たちも社会的には良い面もあつたがそれは一時的

なもので総体的に見れば混沌を生み出す装置の歯車に過ぎなかつたのかもしない。

……やめよ。只でさえ氣が滅入つてゐるのにこんな事を考へるのはさうじて氣を落とさせむ。

コートのポケットに手を突つ込んだ。暖かくはない。でも濡れるよりはマシだった。

途端、視界に何かが映つた。それは河川敷の上の土手道を通る俺を阻むかのように立つっていた。

ぽとん。雨粒がまた落ちた。髪の毛から落ちたのではない。一本の角から水滴が落ちている。

そうだ、今俺の前には白い鬼がいる。彼のコートも俺の物と同じ材質なのか水を弾いていた。彼の手は外に出され、左手は日本刀の鞘を持つていた。

「……今度のターゲットは俺か？」

彼は何も言わない。黙つたまま1mmも動かない。

鬼の面には涙のようすに水滴が流れる。

「助けてもらひに来ました。」

鬼はそう呴いた。その声は少年のようなあどけなさを持ちながらも思春期をぐぐり抜けた青年の垢抜けた感じもした。

オートロックシステムは働いた。自己防衛システムも作動している。

万が一アクセスされてもデータは削除されるように仕組んである。でも彼女は不安だった。

大辺未来。ハウンドドッグのオペレーターであり情報分野を担当する彼女はこの状況下でひたすらに最悪のケースを想定し現実と向き合つた。

下町の商店街。電気屋に並んだ薄型テレビからは衣笠衛の事と自分たちの事を永遠と流し続けている。この報道はさつきも見た。そんな物ばかりが彼女の目と耳を通じて頭の中に入つてくる。

現段階ではハウンドドッグに関する情報は『そういう組織が存在した』という事だけで構成員については漏れていないがデータが盗まれるか政治家が口を開くか。そちらかで決着が着く。そうなれば彼女は本当にお尋ね者となるわけだが彼女もそうはいかない。

彼女が唯一頼れる存在。彼女はその電器店へと足を踏み入れた。

いらっしゃいという年老いた男の声が聴こえる。しかしその男は彼女の顔を見たとたんしかめっ面をして「出て行け」と語氣を強くして言つた。

「わかってるんでしょ、私がどうしてここに来たのか」「……」

男は黙つて後ろを向く。

「分かつてゐからこそ出て行けと言つてゐる。俺はもう引退したし一度掴まつた身だ。それでまた娘に迷惑をかけるなんて出きっこない」

「迷惑つて……私は今困つてゐる、お父さんの力が必要なの」

男は黙つたままで居る。

彼女、大辺未来には男で一つで育ててくれた親父がいた。しかし彼は情報保護だのプライバシーだと警察に言つられて掴まつた。彼はハッカーだつたのだ。元は大手ソフトウェアメーカーに就職していた。けどその職場でやらされていたのは他社のデータを盗むという物だつた。全ては上司に命令された事。しかし上司はお咎め無しにも関わらず彼の父、そこにいる男は逮捕された。

彼女は激怒し、警察とその上司への復讐を硬く誓い彼の残した膨大なデータからハッキングを身に付け警察へのハッキングを開始した。そこで彼女はある計画を目にしたのだ。『ハウンドドッグ計画』秘密裏に事件を処理する特殊警察。彼女はこの情報を公開すれば警察を転覆させ父の仇を討てると思っていた。でも彼女はミスを犯した。警察にバレたのだ。

彼女は重犯罪者として拘留され、ある女性の下へと送られた。それが今上の上司、加藤沙紀。彼女は私の父を釈放してくれるといった。その際に後ろにいたお偉いさん達を無理矢理黙らせた彼女の姿を大辺は今でも覚えている。ただし交換条件があった。それがハウンドドッグへ所属すること。大辺の力を借りる代わりに彼女は父を釈放すると言つたのだ。

そして未だに彼女の父は娘の未来を絶つたという事に対して強い後悔を持つている。それは親からすれば仕方ないことだが彼女からすれば無駄なものだった。

「ねえ、お父さんなら何か出来

「俺はもう何も出来やしない！」

彼は叫んだ。周りにあつた商品がすこし揺れたような錯覚に陥る。でも彼女は諦めなかつた。紙切れを一枚レジの上に置く。

「私は立ち向かうから」

大辺は帰り狭間に後ろを振り向いたが彼は俯いたままだつた。

「……お前の部屋だ。」

彼女の足が止まる。

「昔のお前の部屋に大学に納入予定のサーバーがある。それを使え」

「……ありがと」

そう言うと彼女は振り向き、レジと陳列棚の合間にある小さな階段を掛け登つた。

「助けて貰いに来た……だと？」

俺がそう言うと鬼はコクリと頷いた。彼は鬼の面を付け恐らく俺と同じコートを来ている。俺とは違つて色は白だ。しかしながら幾多の人を殺める為に使われたそのコートはほんのりと赤く、どこか気味悪かつた。

「笑わせるな。俺はお前を捕まえるか殺さなきゃならないんだ」右側に填めたレッグホルスターから銃を引き抜く。何だかいつもより少し軽かつた。恐らくマガジンに装填された弾数が相当少ないのだろう。かといって予備のマガジンはどこかというといつものビルへ置きっぱなしで今から取りに行つたらS A Tに返り咲ちに遭うのが目に見えている。

「撃つたところで俺は殺せないですよ」

「そのコートか。合間を突けば良い話しだ」

俺がそう言つと彼は刀の柄を掴み、鞘から引き抜く。河川敷の芝へと投げ飛ばされた鞘は斜面で転がつたあと浮浪者の居住するダンボールに当たつて動きを止めた。

「そうですか、残念です」

途端、俺は彼から異質な物を感じ取つた。それは殺氣とは違つた物でどちらかと言えば悲しみだとかそういう哀の感情に近いのかもしれない。

覚悟した。そして引き金へと手を掛ける。トリガーセーフティが俺の指を微かに反発しながらも解除される。対する鬼は刀を真つ直ぐに構えて俺を見つめている。

雨足は少しづつ弱くなり始めている。そろそろ雨となり降やむどう。

彼の頭を狙う照準器、今撃てば彼を殺すことが出来る。でも俺には

それへの確信がもてなかつた。恐怖にも似た感覚が俺の指先からじわりじわりと蝕み始め段々と照準がぶれていく。

一閃。白金の光りが俺の前を通つた。咄嗟に腕を突き出した俺はなんとか刀から身を守つた。刃は確實に俺の左腕にあたつているも防刃加工によりコートは一切斬れていない。だがしかし振り下ろした際の力というものはとんでもなく、結果的には峰打ちとして俺の左腕にジーンとした痛みを残した。

その体制のまま俺は懐に向けてゼロ距離で一発、鉛を食らわせた。凄まじい耳鳴りが起きるも案の定彼の服にも傷は付いていない。それどころか俺の銃はスライドがオープンしており残弾がゼロだとう事を示していた。

急いでレッグホールスターにそれをしまつと腰のナイフシースからコンバットナイフを引き抜きそれを構える。

彼との距離は一旦離れた。お互いに相手の様子も見ているのだ。

今の彼も俺も武器は刃物のみ。しかも両者防弾防刃の素材で出来たコートを着用している。

勝負に出るなら早くやらなければ。俺はナイフを強く握り右足を出す。それと同時に彼も動き出す。

白と黒。雨の中で二つが交じり合つた。

日本刀とナイフ。刃同士がぶつかり合つ。金属の擦れる嫌な音を出しながらナイフの短い刃に圧力がかかる。その圧力は刃、グリップを伝い俺の手に伸し掛かるつてきた。

ナイフと日本刀ではハンデがありすぎるのか俺はそうそう彼には近づけなかつた。言つまでもなくナイフと太刀ではリーチが違いすぎる。ナイフにはナイフの利点があるがリーチの問題はどうにもならない。俺達はただただ刃を振るつた。それが相手に対して致命傷を負わすことが出来ないとは分かつていた。俺の体には打撲が相当数出来ているだろう。それは同時に彼の体の状態も現している。もはや殴り合いに近かつたのではないだろうか。

「どうして貴方は、こうも冷徹に」

彼が日本刀を真っ直ぐに振り下ろす。俺はそれをギリギリのタイミングでなんとかかわすと彼の脇腹に目掛けてナイフを突き出した。

「それはお前が言えた事ではない、お前のような殺人鬼が。」

接触する。だが手応えはない。あのコートの合間を縫つて攻撃を行うというのは俺にとっても彼にとっても至難の技だ。

「俺は殺人鬼じゃない！俺は父さんの仇を」

刀の柄で俺の背中を殴る。背骨を殴られた途端、全身に嘔吐感のような物を感じられた。

「どのみちお前が殺つた事の変わりはないだろう、お前は何人の人を殺した？それは政府転覆の為か、それとも他の理由か？」

距離を取る。1m、2m……彼との距離は開き、俺は態勢を立て直す。でも俺は彼の回答に拍子抜けしてしまい、ナイフを上手く構えられなかつた。そう、彼の答えは意外な物だつた。

『俺は政府転覆なんてどうでも良かつた。俺は取引をしただけだ！』

後ずさりし、ナイフを構え直すと鬼の面を見て俺は言った。その鬼の目は小雨に濡れて半べそをかけてる見たいだつた。

「取引とは何をしたんだ？」

すると彼は刀を納め、両手を上げて言った。

「僕は正義を為し、父さんの仇を討つ。その手助けをする代わりに鬼武者という犯罪者を作り、擬似的に模倣犯を作りあたかも国政が左翼に乗つてゐるように見せる。その鬼武者になれと言わた」

「誰にだ？」

俺はこの時ある二つの事に気づきかけていた。いや、片方は気づいていた。彼の正体が分かつた気がしたのだ。

「御子沢遙国家公安委員会委員長。そういえば分かりますか？」「俺はそこで全てが合致した。左翼のリーダーであつた渋沢が何故殺害され、どうして俺たちがS A Tに狙われたのか。そして鬼武者という架空の英雄的な犯罪者を作り出したということ。それがゲーテ

の言葉の現す意味だつたということも。

「……分かつた、協力しよう」

俺はナイフをしまうと右手にはめていた防刃グローブを外す。すると彼もそれを察したのか地面に落ちた達を俺の方向に蹴飛ばした後、白い手袋を外した。

握手をする、さつきまで殺そうとしていた相手に。いや、今から5年前に巻き込んでしまった彼に。

「佐藤大樹。君なんだろ?」

俺はそう言った。その途端彼は固く外さなかつた面を外す。その下にはあの時のあどけなさを残しながらも成長した彼の姿があつた。

「それで、君はこれからどうするんだ?」

雨が止んだ。刀はもう彼の下へ戻っている。俺達は敵対すべき相手ではないと分かつたから。確かに彼は殺人を犯した。しかしそれは5年前に起きた擬似クーデター事件で職務から逸脱した正義感により事件を肥大化させた佐藤大樹の父が政府の手によつて暗殺されたことが原因だつた。

裁判所で有罪判決を言い渡され、彼が刑務所に入れられて俺はある事件は終わつたと思っていた。しかし衣笠は秘密を知つた者は殺さねばならないと考えた。それが俺たちのような人間ではなく政府に牙をむいた刑事ならなおさらだ。

「御子沢の所に行きます。」

彼は力強くそう言つた。

「行つたところでどうする。俺も、君も今では立派な犯罪者だ。結局御子沢は自分を英雄としてプロデュースして君は捨て駒だつたということだ」

そうですね。と佐藤は力なく言つた。それから少しして彼は立ち上

がつた。

「結局、俺は復讐者なんですよ。もう、後に退けない。だから御子沢を」

その言葉を聞いて俺は即座に彼の襟元を掴んだ。特殊素材のコートは弾丸が効かないとはいえど簡単に襟首を掴む事が出来た。

「いいか、お前はまだ更生出来る。俺とは違つ

「何を言つてるんですか、俺は

俺は彼の襟首から手を離した。なんだか自分が惨めに見えたのだ。「亜久さん……なにがあるんですね？」

「聞きたいのか？犬になる前の殺人鬼の話を」

俺は卑下するように言った。でも彼は曇のない目で俺を見つめた。それが更に俺を惨めにさせたがそんな目を見たら大人げないマネをするのは阿呆に思えてしまった。

俺があの時知った事は一つ。

血は洗い流すことが出来るといふこと。しかし血は血で洗う事が出来ない。

そしてもう一つは固まつた血は落ちないといふ事。

俺はもう手どころではなく体まで染まりきつた赤を洗い流す事は出来ない。奴とは違つた、あの時のアイツとは

深夜。古ぼけた貸倉庫には大型のファンの間から街灯の僅かな明かりだけが灯つっていた。

遠くからおびただしい数のサイレン音が聴こえる。その音の集合体は一曲の交響曲でも奏でるかの如く重なり合い個々のサイレン音が同じではなく、それぞれ違つた性質を持つてゐるかのように響いた。

少年は倉庫にいた。彼は両手を後ろで縛られ両足はテープのような物でぐるぐる巻きにされている。足のほうは何とか力を入れれば外せるとは思うが今の彼にそれは無理だった。

彼は衰弱していた。父も、母も目の前で殺され臓器売買の為に生かされた存在。それが『今の彼』だった。

口もガムテープで抑えられ表情はその腫れぼったい泣きじやくつた跡の残る目から推察するしかない。でもその目だけからでもわかるように彼の目は生氣を失つてゐる。

コシン、と倉庫の中に音が響いた。黒いトレンチコートを着た男が口に火のついていないタバコをくわえて少年の方へと歩いて来る。彼の手にはオイルライター。冷たい秋風に火を消されまいと左手を

風よけにしながら火をタバコへと近づける。

「気分はどうだ？」

男は口から煙を吐き出し、少年に吹きかけるとそう言った。

「……」

「答える気力も無いか それツ！」

途端、男は少年の脇腹に革靴で蹴りをいた。それには衰弱していた彼も思わず生理的に声を漏らし、逆流した胃液をむせながら地面へと吐き出した。

男は「汚えな」と侮蔑の言葉を浴びせながら割られた窓から外を見る。外にはパートカーが何台かこちらに向かっているのが見えた。それを確認すると男は少年を引きずるように倉庫の外へ運び出す。そして黒塗りのセダンのトランクへ少年を押し込み、運転席へと向かう。その途中、彼は携帯電話を取り出すと誰かに掛けた。何回か呼出音がした後に老いた男の声が聞こえた。

「おい！どういう事だ、取引はどうした！？」

男は怒鳴るように言うが向こうは何も言わない。舌打ちをする。彼は通話を切つて携帯電話をコートのポケットにいれた。

それと同時に、黒塗りのセダンは四方向から強烈な光に挟まれる。警察だ。

彼はそれを見てため息を着くと両手を上げて車から出た。

「お手柄でしたね、加藤管理官」

髪の毛を綺麗に七三に分けた昔のサラリーマンのような男がそう言った。

省庁から現場へ行こうと階段を降りていた加藤沙紀。彼女にその言葉は邪魔以外の何者でも無かつた。彼女はまだ事件を解決出来ていないからだ。

「臓器バイヤーを逆手にとつて逮捕に踏み切るとは

男は尚も加藤の事を褒めちぎるが彼女の耳にはその言葉は一言たり

もと入っていなかつた。彼女はただただ足を動かす。まだ被害にあつた子供は親のいなまま取り残されている。彼女にとつて被害者全てに恒常性を取り戻せる事が事件の解決であつた。

白いつまらない空間の中に少年はうつむきながら座つていた。カウンセラーの男性が彼に近づくも拒絶するように向ひ話をせず、たゞしつとつむいたまま下を見つめているだけだつた。

「んでー、彼に関する情報は？」

「ええ、まとめてあるんですが……」

加藤の部下に当たる捜査官は言葉を濁す。

「何？後ろめたいことでもあつたのかなー？」

「いえ、そうではなくて」

すると捜査官は一枚の資料を見せた。

「……なにこれ？」

渡されたのはほぼ白に近い紙だつた。そこに書かれているのは推定年齢、性別、健康状態それだけ。

「名前や戸籍情報は一切無いのかしらん？」

加藤は腰に手を当て、少年のいる部屋を見る事ができるマジックミラーにもたれ掛かつた。

「それが、厚生省のデータバンクにも一致する情報が無くてですね……」

「まさにゴースト　か」

彼女は青白い少年の顔を見ると皮肉るように呟ついた。

少年の目は反抗的でもなんでもなかつた。その目からは何も感じられない、何も感じていない。無だけが伝わる。

加藤は高いヒールの靴で床をコツコツと鳴らしながらドアの方へ歩いた。心理カウンセラーが加藤に一礼すると彼女はカウンセラーに

手を振つて応え、部屋へと足を踏み入れた。

少年は俯いたまま何も変わらない。加藤が「ここのちわあー？」とか言つてみたが決して動じなかつた。呼吸の音と僅かな心音だけが部屋に響きわたる。

マジックミラーはこちらからは見えず無効で部下たちがどんな顔でこっちを見ているのか分からぬ。しかし今の加藤にはどうでもいいことだつた。

「あー……ちょっと待つてくれるかな？」

そう言つうと加藤は少年の反応を伺つたが彼はやはり微動だにしなかつた。仕方なく加藤はポケットから携帯電話を取り出す。登録された電話帳の五行から御子沢遙という名前を見つけ出すと彼女はそこへ電話を掛けた。

プルルという音が耳へ響き、僅かに耳とスピーカーの間から漏れる。ややあつて女性が電話に出た。

「あー、はるかあ？ちょっと訪ねたいことがあんだけども

「沙紀、今会議中なんだけど……」

「こりゃ失敬」

そう言つうと加藤は一方的に電話を切る。「待ちなさい！」とか聞こえたが彼女は無かつた事にした。

「んで、君の事を教えて欲しいんだけども？」

少年は何も言わない。

見た目中学生ぐらいの少年。平均的、もしくはそれよりも少しやせ細つた体には適度に筋肉がついていて虐待を受けていたようにしては比較的軽傷に見えた。おかしい。何故こんな単純なポイントに皆気づかない。

すると途端彼女の携帯電話が鳴つた、部下からだつた。

急いでその電話に出ると第一声に部下の男が息切れした声でぜえぜえ言いながら言つた。「被疑者が死亡した」と。

「どうじつこと？奴は拘留中だつたはずよねえ……舌でも噛んじゃつたー？」

加藤は部下の捜査員とは対照的な面持ちでそう言つた。

「いえ、そうではなくて」

捜査員がそう言つと加藤は「じゃあ何なのよー」と歯を尖らせながら言つた。

「内臓が破裂してたんですね」

その言葉を聞き、加藤の顔からは先程までのふ抜けた感じが無くなつた。

「…………それってどうじつこと？」

「いえ、まだ死亡鑑定前なので詳しいことは分かりませんが腹部に比較的最近の物と思われる傷が何箇所か」

加藤は顎に手を当てる下を向く。

「奴が殺した相手ともみくちゃになつた痕跡つてあつたかしり？」

「えつ？殺した相手ですか？」

「そうよ、三十歳ぐらいの男女がぐちやぐちやにされて殺されたはずだけど」

加藤はそう言つて事件の概要を話したが捜査員は何も知らないと答えた。おかしい。確かに彼は前回の密売人の逮捕には参加しなかつたが情報は知れ渡つてゐるはずだった。

「あの、よく分かりませんが鑑定結果が出たらお知らせします。それでは」

彼女の部下はそう言つて電話を切つた。彼女は事件の事について引つ掛かつてならなかつたが今は田の前の少年をどうにかすることが先決だつた。

戸籍だとか情報は一切ないらしいが取り敢えず彼は殺害された男女の間に生まれた子供である可能性が高かつた。だとすれば彼は田の前で両親を殺され、犯人に引きずり回され、そして想像しただけで悪寒が全身に走つた。電撃のようなしびれが恐怖を具体化する。

加藤は少年の顔を見た。彼女からは少年の顔が少し違つて見えた。笑っているように見えたのだ。

ややあつて加藤は諦めるかのように部屋を出た。その後も何時間も粘つたが彼は一向に口を閉ざしたまま。PTSDか何かの一種じやないかと心理カウンセラーに聞いてみたが可能性は十分に有り得るが現段階では何も言えないと言つた。

彼女はそのまま少年の保護されている施設を出た。地下には小さめの駐車場があり、彼女はそこに止めておいた自分の車のロックを外し、運転席へと乗り込む。

するとその途端に携帯電話がピリリリリリとプリセットされた何の変哲も無い電子音を鳴らした。液晶画面を見るとそこには御子沢遙と表示されている。恐らく会議が終わつたのだろう。

今、日本は重要な時期を迎えている。長きにわたつて続いた総理大臣が1年ずつ交代していくという状態。それによつやく終止符が打たれるような政治が行われ始めた。それは決して「良い」意味で終止符が打たれる、善良な方法で政治が変わるものではない。

国会という権力が、国會議員という、内閣という自身の虚栄心、繁栄心のみを優先し悪政を繰り返した者達が形的に一掃され、隠されることによる完璧な独裁が始まる。

近年当選した衣笠衛は上つ面では官僚と今までの政治体制を目の敵にし、あたかも自分が正義だと言わんばかりの演説を行い、改革を推し進めると言語していた。その結果がこれだ。

電話を取ると第一声に御子沢は言つた。「決まつてしまつた」と。それを聞いて加藤は何のことなのかはわからなかつたがその直後に全てを理解する。

加藤は何が起きたのかを御子沢に問う。

「だから、決まつたのよ」

「だーかーらー。主語がないわよ遙あ？」

彼女はそれの一点張り。

「……ハウンドドッグよ」

「は？」

加藤はポカンとした。ハウンドドッグというと獵犬の一種だ。主に獲物を追い詰めたりする際に使われるがそれが一体何を意味するのかがわからなかつた。

キーを回し、エンジンをスタートさせる。ほのかなガソリンの臭いが花を突く。

「ハウンドドッグって一体？」

加藤はエンジンをかけ、メーターを見た後に何かに気づいた。エンジン音は自分の車だけではないということ。だがしかしながらこの施設は一部役人にしか知られていない重度の精神疾患を持った者を介抱する。いや、閉じ込めるといった方が表現としてはあつていいのだろう。施設であり、今は加藤以外地下駐車場に止めている者はいなかつたはずだ。

エンジンの音のする方へ振り向く。彼女の向かつて右側にその車はあつた。黒塗りのセダン、如何にもお偉いさんが乗つていそうなその車の中を見る。そこにはスーツの男が一人と 青緑の患者衣を着た少年。先程の『彼』だつた。

「はつはーん……遙、ハウンドドッグって前に言つてたアレ？」

「そうよ、アタシ何度かオファーしたハズだけど沙紀つたら尽く断つたじゃない。御陰で最低の組織に最低のゲス野郎が就いたつて訳。その結果がどうなつているのかは今の沙紀の目の前にあるハズよ」「ええ、その通りねえ……。公安にかけあつておいてよ、アタシひとりじや無理だつつの」

そう言つと御子沢は小さくため息を着いた。

「一介の国会議員に何が出来るかなんてわかんないけど、やれることはやるわ」

「んじやー頼んだわよ」

加藤はそう言って通話を切るとアクセルを踏み込んだ。

ハウンドドッグ。この組織は当時としては（今もだが）革新的だったのだろう。これまで国會議員が必死こいて隠してきた物を隠す専門の特殊警察。そして衣笠はマスクへの情報統制を行い、それも全てハウンドドッグを始めとする各諜報機関によつて隠蔽された。この組織が出来たのはさほど昔ではなくまだ10年経つたぐらいだ。設立当初は国会内部でも波紋を呼んだがいざ極秘に行われた審議会で可決で通つてしまえば誰も何も言わなかつた。自分たちにとつて都合のいいシステムだからだ。

いくら何をしても許される。それは社会の基本的なルールをねじ曲げることによつて社会を形成する。隠されることによる新たな社会の形。あらゆるモノにプライバシーがあり、それが隠されるようにな悪事にも隠される権利がある。その結果として今の日本がある。今の日本は理想的な民主主義国家に見えるが実情は国が甘い汁を啜る為に存在する独裁国家。それは変わりもしない事実であり、ここ10年一切変わらない恒常性をも生み出そうとしていた。

加藤の車はハウンドドッグの車を思われる黒いセダンから約1~2台離れた所から追いかけていた。向こうも警察だし何よりもお役人と政治家御用達の特殊部隊。彼らに接触するには細心の注意が必要だった。

そう考へると遙はある意味異端者なのとかと加藤は思いふけりながらハンドルを切る。

あの少年をどうするのか、加藤にはわからなかつた。だがしかしひとつだけ言えるのは彼は捜査本部の管理下で保護されている身であり政府の犬たるハウンドドッグには関係ないということ。

そんなことを言つたら「無用な正義感だ」と言われ、ハウンドドッグに殺されるだろう。そんな事目に見えている。

ハウンドドッグは正式に認められたのが今日なだけであつて今まで

もわざかながら加藤の耳にもその噂は届いていた。『最低の警察組織』があると。

もともと彼女は警察自体に正義があるとは思つてなかつたしハウンドドッグがいくら非道な組織であろうと自分たちが言える立場では無い。思い起こせば昔の警察といえば中学生や高校生も習うように無理矢理自白させ、冤罪の犯人を捕まえたりとやりたい放題だつた。それが今でも続いているのか?と問われれば加藤は「NO」と答えたい所だがそうはいかない。限りなく白に近いグレーなのだ。あるいは断定できないが必ずしも無いとは言い切れない。だがハウンドドッグはそれが違つた。いくら殺つても良い。それは今彼女が追つている車のように真つ黒なのだ。

その車は途端に細い道へと入つた。車が一台通るか通らないか程の。加藤はもしかして尾けていたのがバレたかと思つたが今更あた戻りは出来なかつた。

薄汚れた灰色の塀の間を通る。彼女は車体を擦つてしまふんじやないかとビクビクしながらゆっくりとアクセルを踏み込む。ハウンドドッグと思わしき車はもうこの細い道の終わりまで出ていて比較的人通りの無い大通りへ向かう。加藤は勝負に出た。一気にアクセルを踏み込む。大通りに出たらあのセダンの前に出る。そして少年を連れ戻す。そう言う寸断だつた。

だが前方の黒いセダンは動くのをやめた。しかしアクセルを踏み込んだ加藤の車はそう簡単に止まる訳ではない。車は急には止まれない。彼女は管理官になつてようやくそんな事を理解した。

ドン!フロントガラスが割れ、エアバッグに顔を埋める。予想は出来ていたとはいえ痛かつた。シートベルトの重要性というのを再認識した加藤を脳震盪を起こした頭を抑えながらシートベルトを外し、衝突でロックが外れたドアから外へ出る。それと同時、ぶつかつた車に乗つている男たちも車内からおりた。

「あつははは……大丈夫です……か?」

頭を搔いてはにかみながら加藤はそう言つたが相手側は全く表情を変えなかつた。サングラスをした厳つい男一人が顔を緩ませることなく彼女を見つめる。

「お前、加藤沙紀警視正か？」

「あら、理解が早いじゃない。助かるわね」

そう言うと加藤は護身用のリボルバー拳銃を収めた腰に手をあてながら男の下へと近づく。車の後部座席、左側には例の少年がいた。おそらくこの車のドアは内側から開かないのだろう。なんというか非常に残念な扱いを受けている彼は被害者といふのに。

「その少年、うちの管理下にあるんだけど。返してもうえるかしら？」

加藤は顎で車を指しながらそう言つた。しかし男はため息をつくと何事もなかつたかのように車に乗り込む。よく見るとセダンの後方はまったく潰れていない。対する彼女の車はペシャンコだ。

すると男はパワーウィンドウを開き、加藤に向かっていつた。「文句は政府に言え」と。

そして車はそのまま発進する。無論、加藤は呼び止めたが止まる気配もない上に追いかける術もなかつた。

「つたぐ、何様のつもりよ！」

車のドアを蹴る。先程の衝突でボロボロになつた彼女の車はもう動きそうにはなく、今は怒りの矛先でしかなかつた。一応車両保険を掛けたおいたしレッカー車も来るらしいので問題はなかつた。あるとすれば少年がハウンドドッグに引き取られたこと。彼は被害者であり加害者ではない。政府の悪事を隠すための組織であるハウンドドッグが出る幕では無いはずだ。

そこで加藤は前に御子沢に言われた言葉を思い出した。ハウンドドッグに関するオファー、加藤の親友であるということから御子沢を伝つて本人にそれは伝えられた。その際に御子沢が言つていたのだ。

「彼らはどんな事情、立場を持っていたとしても政府の依頼を最優先とし、躊躇無しに実力行使する」と。

だとしたら彼はある事件の時、被疑者に捕らえられた時に偶然にも政府に関する機密を知ってしまった。そしてハウンドドッグが手を下しにきたのではないか？彼女はそう考えた。

しかしあの時少年は何の抵抗もなしに彼等に連れて行かれた。いや、あれほど精神的に衰弱した少年が抵抗することの方がおかしいのだろう。

だとしたら彼は殺されてしまうのではないか？最悪のビジョンが脳内に映し出される。まだ成長期真っただ中の少年。15か16ぐらいの少年が血を垂れ流し、桃色に染まった肉をまき散らして倒れる姿。

ゾッとした。彼女は息子などいない。だからこそこういったケースで遺された子供たちに對して全力をつくしてきた。今回もそうしたかった。

だが、権力と言ひ名の無思慮な壁が彼女の前に大きく立ちはだかつた。

「非検体01亞久聖か……」

白衣の男が安っぽい事務椅子に座りそう言つた。目の前には大男一人に取り押さえられ体の自由を奪われた少年がいた。

少年の目は曇っていた。でもその中には純粹さもあり、赤子のようだった。

「悪くないな。いい仕上がりだ」

彼はそう言つと椅子から立ち上がる。そして立ち上がったあとにトントントンと指で机を何回か叩いて見せた。後ろにいた両脇の大男二人は何がなんだか分からぬ様子でサングラスの下に隠した厳つい目を見合させる。

途端、片方の男の目が消えた。いや、正確には顔が消えた。残つたのは生々しい跡を残す首の断面と美しい赤の鮮血。その血液が絵道具のようにもう一人の男に降りかかった。

びぢゃ。

何かが垂れた。男は振り向く。その途端、激痛が全身に向けて迸つた。その光景はよく見えた。でも見たあとももう一度確認をせざるを得なかつた。

足が消えていた。その代わりに赤く染まつた患者衣を身に纏つた少年がいた。少年の手にはコンバットナイフが一本、綺麗な赤色を垂らしながら握られていた。

視界が反転する。ドシンと頭に転んだ衝撃が響いたあと意識は消えた。

拍手の音がする。乾いた空間に乾いた拍手の音。白衣の男ははにかみながら「上出来だ」といつた。

それを見ると少年も少しだけ笑つた。そして男の脇腹へナイフを差し込み、腹から股関節までを一気に切り裂いた。

血液が窓ガラスについた。そのガラスはマジックミラーになつていて外からは見えるが内側からは只の壁のようにしか見えない。ではそのガラスの中には何があるのかというと中学生か高校生ぐらいの少年と先程まで人間だったモノが三つ転がっていた。

その「モノ」からあふれ出た液体がガラスにべつとりと付着して中の様子を見づらくさせている。

「サーヴァント計画はここまで来たのか……」

血に染まつたガラスを見ながら誰かが言った。

「ええ、既に調整の多くは終了しています。あとは実践を積むだけですね」

もう一人がそう返した。

「サー・ヴァント 徒者 に獵犬。皮肉だな」

「いや、彼こそまさにハウンドドッグに相応しい人材ですよ。我々の研究が平和に役立てられるなら光榮です」

「平和 そうだな。」

彼は何か思い老けたような顔をした後、マジックミラーに遮られた部屋から出る。ドアは金属製でズシリと重かった。

「……それにしても良く出来たな」

部屋に残された男は鏡をなでるように触りながらうそついた。

「まさに芸術品。美しい殺人だ、悪と聖の融合。」

赤い光が世界を見たす。昼と夜の境界線、日没が始まったのだ。時期的には日が短く、学校が終わつたのか学生が眞面目に部活に取り組んだり勉強したり。しかしそれだけではない。頭髪を染めた男や女が群れて路地裏を占拠する。亜久はいつもそれが気に入らなかつた。力のない弱者が群れてるだけの集団に構うつもりはない。彼にはやらなければいけない事があつた。でも彼らはそう言つた寛容というものが何か透かした顔をした亜久を見るなり喧嘩を売り、そしてやられていつた。それでも彼らは憲りないものでまた口先だけの弱者を呼んでは群れて襲つてくる。亜久は今日もそう言つた目に遭うんだろうと思いながら歩いていた。

タバコや酒。本来未成年が行なつてはならない物をまるで自慢するかのように見せびらかしている。煙をふかしながら頭髪を弄り携帯電話を操作しては迷惑な大声の雑談が耳に入る。

ただ邪魔だつた。今の彼に見えているのは自分の存在意義 レーンテール それしか無かつた。それを見出すことのみが彼の生きがいだつた。

淀んだ空を見上げた。星の見えない汚い空はある意味満点の星空よりも彼を吸い込むような感覚に陥らせた。

凍えた手を暖めようとコートのポケットに手を入れた。その下に隠したナイフの形が微妙に分かつた。

「……おい、何無視してんだテメエ」

またか……。亜久はそう思つた。

もう殺したいぐらいにうんざりしていたのだ。

「俺に何か用か?」

亜久は肩をすかして首をかしげながらそう言つた。

「ああ、もちろん用があるんだよ。なあ?」

スキンヘッドの男は後方にいた頭髪を染めた男達に同意を求める

その男達は若干の時間が経つてから軽い返事をした。

「で、俺は急いでいるんだが。そんなに大事な要件か？」

「ああ、大事な要件だ…」

スキンヘッドの男はそう言つた途端に亜久に向かつて拳を突き出した。しかしながらそのパンチは擦る事もなく亜久の頬の横を通つた。うんざりした。本当にうんざりした。

だからもう止めにしようと思つた。

悲鳴が耳元で鳴つた。顔に血が当たる。

スキンヘッドの男は声にもならない悲鳴をあげると亜久の方を鬼のような形相で見つめた。だがそんな睨めっこをしたところで戦局が好転する訳ではない。今、亜久の手には街灯を反射した刃があり、その刃からは赤い液体がぽつりぽつりと垂れていた。勿論その液体の正体は彼が男の腕に刺した場所から溢れた血液である。

後ろにいた男たちは激昂した。仕方ないので亜久はナイフを一旦男から引き抜くと足に一突きしてやつて動けなくさせる。そして流れるようにナイフを引き抜き向かつてきた男たちの脇腹を同時に横に切り裂いた。

倒れた男たちは悲鳴を上げ、驚嘆した。

亜久は血に濡れたナイフをまじまじと見つめた後、その切つ先を彼等の心臓へと突き立てそのまま押し込んでやつた。

死体をそのまま、ナイフを腰のナイフシースにしまつている途中で携帯電話が鳴つた。まもなくして電話に出ると变成器でも使つたような奇妙な声がした。

「計画に支障を來すようなマネはやめて頂けますか、亜久 聖？」

彼は黙つてその声を聞いた。

「目標はあんなチンピラじゃないんです。もつすこし寛容を持ちなさい」

通話が切れる。

亜久はその一方的な通話の内容が気に入らなくて死体に蹴りを入れた。

現在 都内某喫茶店

コトーン、カップを置く音がノスタルジックな雰囲気の空間に響いた。カウンター席に座った拳隆と嶺崎はマスターから珈琲を受け取るとそれを啜つた。まだ冷めていない熱い珈琲は猫舌な嶺崎にはきつかったらしくフーフーと息を吹きかけている。

「んで、適当に経緯を語つてくれるとおじちゃん嬉しいんだがね？」
喫茶店のマスター。白髪混じりの髪を後ろで束ねた彼は黒いエプロン姿でアルコールランプを灯しながらそう言った。

「それがわかつてりや俺も苦労してねえしこんなとこにわざわざ来ねえつつの」

拳隆が不貞腐れながら珈琲をするとマスターはそつけない返事をした。

年代物の薪ストーブがごうごうと音を鳴らし、BGMのジャズサウンドと絡み合うように程良い音量を保つ。

「まあ、どの道武器は持つてたって困るこたあねえだろうな」
マスターはアルコールランプをサイフォンにセットする。

「あの……お二人はそういう関係で？」

途端、嶺崎がおそるおそる聞いた。しかしながら拳隆もマスターも一度目を合わせたきりそっぽを向いて何も言わない。

「似た者同士なのさ」

新聞紙をひろげながら後ろの席に座った男が言った。

「似たもの同士って」

「ああ、もういいよ。おやつさん、案内してくれ」

拳隆は飲み終えた珈琲のカップを力任せにカウンターーテーブルに置くと立ち上がりてマスターを見て、そう言った。

「……仕方ねえな。その気だつたら最初から言えってんだ」
店主はそつと黒いエプロンの右側についたポケットから鍵を取り出す。

「ついで来い、品揃えはある時以上だ」

カウンターから出る。アルコールランプはそのまま、マスターは奥の暗がりへと向かう。そして嶺崎と拳隆もそれに続いた。

「なるほど、こっちの方も立派で」

薄汚れたスイッチを押す。そうした途端に暗がりは一気に明るくなつた。お店の倉庫のような所に来させられて二人はさらにその奥の暗がり。つまりは今いる所に連れられてきた。

その部屋は黒光りしている。その正体は金属。無骨な金属製のパーティ群が群れを為して光りを反射する。

「これって全部……」

「ああ、銃だ」

マスターはその中から一丁、結構小柄なショットガンを取り出すと拳隆に手渡す。

「お前に好みなんぞ把握してるつもりだ。そうで近場でドンパチするしか能がねえんだからな

「そりやどうも」

拳隆はマスターの皮肉を受け流しつつ、銃を確認する。ソードオフショットガンだった。

「どうせ警察とやりあつんだら」

「……まあ、そうなるな」

拳隆は埃っぽい壁に寄りかかるとカートが入っていることを確認し、

マスターから弾薬を受け取る。

「あいつの言つとおり公安には悪い噂が流れてるって話だ。それは同様に衣笠にもな」

「それは俺たちが一番良く知つてゐるさ」

拳隆はそつとライダースジャケットについた埃を払つた。

薄暗い倉庫からショットガンを片手に拳隆が現れても奥の席に座っている男は顔色一つ変えなかつた。イヤホンから流れる音に耳を傾けながら新聞紙を熟読する。

「翔、随分と余裕そうだが」

「ああ？」

男がそう言つと新聞紙を畳み、イヤホンを耳から外す。冷めた珈琲を口へと運ぶ。

「どうやらS A Tの連中公に動くらしいが」

「おじおい、そういうことはさつき聞いたときに言つてくれよ」

拳隆が不貞腐れながら言つと男は「いや……」と言葉を濁しながらイヤホンを指さした。よく見るとイヤホンのジャックは先程まで聞いていたラジオから外され、大きめの黒い箱のような物に繋がれている。

「…………まさか！？」

途端、窓ガラスが音を立てて砕けた。その刹那、拳隆はカウンター席にいた嶺崎を無理矢理地面へと伏せさせる。

「クソッ、警察の無線傍受してたなら初めから言えつてんだよ」

「金を受け取つてなかつたからな」

初老の男はテーブルを盾に隠れながらそつと言つた。

「全く、やつぱりアンタは素直じゃない　ね！」

店内の柱から飛び出す。拳隆は直ぐ様フオアエンドを前後にスライドさせ、排莢を行うとトリガーを引く。シェルに収められた何十、何百もの弾丸が炸裂し、攻撃を仕掛けた者へと向かっていく。着弾

した鉛はS A Tのタクティカルベストをも突き破り腹から臓物と鮮血を溢れさせる。

「流石だな、よくメンテが行き届いてる」

もう一度ポンプアクションを行い、排莢、発射する。悲鳴と銃声。

鉄の臭いと火薬の臭いが鼻を突く。

「当たり前だ、誰の銃だと思つてんだ」

そう言つてマスターは急いでランプの火を消し、カウンターに身を隠す。

「で、旦那。敵の数は？」

拳隆は壁に隠れてシェルを詰める。一部始終を見ていた嶺崎はもう泣きそうになつていて亞久と一緒に居たときは大丈夫だったのかとちょっと心配になつた。

「数はそう多くはない。巡回中の連中がたまたま見つけただけだ、いまから逃げればそう簡単には捕まることはあるまい」

「そうか、ありがとよ」

壁から飛び出し、先程詰めたショットシェルに収まつたベレットを撃ち出した。向こうが撃つてきた9mm弾が頬を掠つたが特に痛くもなく、赤い血の線が一本出来るだけだつた。

「出た、東京都千代田区霞が関2丁目1番2号」

嶺崎は死体の前で地図を広げ、愛用の振り子を使ってダウジングをしていた。何を調べていたかと言えば無論、敵を親玉の位置だ。

「この住所は国家公安委員会だな」

地図を見て初老の男はそう言つた。

「やっぱり俺達はそろそろ向き合わなきやいけないんすかね、いろんな物と」

ジャケットのチャックを締め、拳隆はそう言つた。マスターは死んだS A Tの隊員を寝かせ、黒い袋に詰めると一緒に防腐剤を入れ始

めた。

「こつちの事は俺に任せろ。あとは好きにせんな」

そう言つてマスターは鍵を渡した。何のキー ホルダーも付いていなしシンプルな鍵を。

「お前さんが昔使つてたバイク、この通りの裏にある。早くどうかに行け、この疫病神が」

「……言わねなくてもこんな店さつわと出でへつてんだ。ほり嶺崎、

行くぞ」

拳隆はそつ言つとマスターの向く方とは逆に向いて歩きだした。それを見た嶺崎が「待つてください!」と言つながら追いかける。

「やはり似たもの同士だな

「ひるせえな、お前も追い出すぞ

マスターは初老の男から新聞を取り上げると死体の入つた袋を持ち、店の奥へと消えた。

G o b a c k .

あれから数日が経つた。加藤の車はレッカー車に運ばれ高額な請求書が届けられることとなつた。それはいい、問題はハウンドドッグだ。既に捜査本部は解散の運びとなりあの少年は表向きに「警察が保護」となつた。確かに間違つてはいない。だが一番のポイントは保護したのがよりによつて政府機関の汚職をかき消す最低の組織であったこと。

加藤は頭が回らなかつた。あの少年はどうなつたのだろうか?殺されてしまつたのだろうか?あの時、ハウンドドッグに遭遇したときに頭に浮かんだ惨状が脳裏に蘇える。それが何回も起きたのだ。仕事は手につかないし口うるさい上司からはこつて酷く叱られた。「公

安に委譲した事件にはもう関わるな」と。
まるでその口調は何かを恐れている、何かから逃げているようだった。

「やつぱりさあアノ野郎ぜえつたいに何かかくしてると思ひのよね
水の入ったグラスをカウンター席のテーブルに置いてそう言つた。

「……ねえ沙紀、あんまり深入りしない方がいいわよ」

お世辞にも綺麗とは言えない定食屋。店内には昼休みの会社員でひしめき合っている。

「なによお、遙まであのジジイに肩入れすんの一？」

口を尖らせて加藤はブーブーと御子沢に批難を浴びせる。しかしながら御子沢は冷静に「ちょっととした忠告よ」と言つておばちゃんから口替わり定食を受け取つた。

「……沙紀、正義感だけじゃどうにかならない」とぐらり分かつて
るでしょ？いい加減大人になつて」

味噌汁を啜る。豆腐の味噌汁は昔ながらのお袋の味という感じで体だけではなく心も温める。その間に加藤には生姜焼き定食が運ばれる。彼女はそれを有難うございます等と感謝の言葉を述べながら受け取る。対する定食屋のおばちゃんははにかみながら次の仕事に取り掛かった。

「確かにさ、正しいことだけじゃビーにもならないことなんてこの世にはめいっぱいあるわよ。そりゃもう沢山ねえ」

割り箸を割る。パチン、という音がして細い木は二つに分かれる。

加藤の箸は見事に真つ二つとなつた。

「でもさ、それでも私達は警察なのよ。どんな理由があつてとして
もさ自分が正しい事をするつてのがアタシの仕事なんだって思つて

る

加藤は生姜焼きに箸を伸ばす。しかしながら御子沢は全く箸を動かそうとせずに指をフルフルと震わせていた。

「……何よ？」

すると途端、御子沢は震えていた手を口に当てて吹き出した。

「なつ、何よそれ……青臭すぎるわよ……」

その言葉に対してもう一度口を尖らせて抗議してみせる。

「いやあ。『ごめんごめん、随分と立派な話しだったからさ』

そういう御子沢の目はどこか笑つていて笑いで流した涙をハンカチで拭き取っている。

「馬鹿にしてるわねえ？あーあ心外だわ、親友だと思つてたのに」加藤はそう言つてため息を着いた後、黙々と箸を動かした。

「……でも、組織でそんなモノは通用しないのよ」

御子沢がボソリと呟いた。しかしその声は加藤には届いておらず彼女は半分やけ食い状態で生姜焼きにかぶりついた。

日が落ちる。彼はこの光景を見飽きている。

赤く照られた赤い死体。全てが赤で統一されたこの空間にうんざりしていた。手にもつたナイフも、銃も、服も。あらゆるもののが赤く染まる。

イヤホンからノイズが聴こえる。その後、ボイスチェンジャーを使つた男の声がそこから流れる。

「目標を殺害したか？」

男はそれだけ問うと亜久は「ああ」と肯定した。

「そうか、順調だな。この調子でメニューを継続しろ」

もう一度ノイズが入る。ブツツと何かが切れたような音がしてそのノイズは消えた。

ナイフを見る。銀の刃は赤い液体がねつとり付いていた。亜久はそれが嫌で死体をつかつてそれを拭き取るとナイフシースへと戻す。

命令に従い、殺す。まだ二十歳にも満たない彼の存在意義はそれだった。その為だけに生まれてきたと彼は思っていた。

もう一度死体を見る。今日殺したのはアジア系とアフリカ系の在

日外国人。どれも全てが社会の裏での仕事を生業としてきた人間で現政権と関係のあるものだつた。金を巻き上げ不必要になつたら殺す。実にシンプルなシステムだ。

死体の処理は大抵下部組織がやつてくれるとかで彼は何も気にしていなかつた。だからこそ不良やチンピラをいとも簡単に殺してしまつたりもするがどうでもいいことだつた。

靴底がアスファルトを踏む。微かにその音が虚空に響き、消える。ポケットから携帯電話を取り出すとそれで地図を開いて次の目標を探し出す。ここから徒步で10分。さほど遠くは無いと彼は思つて休憩を挟もうという考えを取り消すことにした。

ズボンのポケットに携帯電話をしまうのはなんだか違和感を感じる。それよりもホルスターに銃を入れた方がしつくりした。

路地を出ると比較的交通量の多い国道へとでた。とはいってもこの時間帯はそろそろ通りも減つてくるような時間で多くは学校帰りの学生を見かける。見た目高校生の亜久だが他の学生たちは彼を見て何も思わなかつた。ただ変わつているなと感じてゐるだけだろう。隠し持つたグロックは周りからは見えないしさか腰にナイフを締まつているなんて想像もつかないだろう。すれ違つた学生の多くは友人との雑談に興じながら歩道を歩く。広がつて歩くその様は彼にとってとても邪魔だつたが気に止めることはなかつた。

「見つけた」

誰かが声を掛ける。

黒いスースを着た女性が一人、街路樹と街灯の間に屏に寄りかかるようにして立つてゐる。

「……お久しぶりです」

亜久はそう言つて彼女の前を通りすぎようとする。しかし彼女の横を通りうとした途端に細い腕が肩へと伸び、動きを止めさせた。

「簡単に通らせてくれるなんて思つてんぢやないでしょーねえ？」

短い黒髪を無造作に散らかした彼女は亜久の目を見て言った。

「亜久 聖くん？」

御子沢は首相官邸へと向かつていて。早足で歩くその音が雑多にまぎれてかき消されていく。

傍らには黒いブラインドファイル。無論、周りから中身は見えない。これを今すぐ首相の下へ届けなければならない。彼女の正義感が事を起こした。それは加藤から伝染してしまったものなのだろうか。それは彼女にもよくわからない。

今考えればこれを加藤に渡せば万事解決、全ては彼女がやってくれる。そうするべきだった。なのになぜ私はこんなことをしているのか？ 解決不能な疑問を抱きながら歩く。

ファイルに入っているのは独自に調べ上げたハウンドドッグの資料。これほどまでのデータが出揃えば連中の悪行は晒され、全ては元に戻る。

あんな法案、通す方が馬鹿だ。倫理観が余りにも欠如しすぎている。殺しを殺しで対処し、犯罪を犯罪で消し、全てを無に葬る。辛辣に批判しながらも結局はそれが人間の宿命だと考えると彼女は落胆した。

途端、一人の男が目に入った。割腹の良いその男は狂気に満ちた笑みを浮かべると御子沢の行く手を塞ぐように立ち止まる。

「……どいてくれるかしら？ 私は忙しいんです」

「それって惚けているんじょつか？ 私が誰なのか分かっているはずです。御子沢議員」

「ええ、分かっています。瀬島特殊警察課長。いや、ハウンドドッグ」

彼女はそういうと瀬島の顔を見上げた。1m90cmはあるのではないかという長身の瀬島と少々小柄な御子沢が向き合つと一見して

父親と娘のよにも見える。

「恐らく貴方は總理直々に私の解任して貰つつもりでしょ？」

御子沢は動かない。一人は睨みあうようになった。

それから少しして瀬島は低い声で笑い声を上げる。

「残念でしたね、私は先程總理に辞表を提出してきたんです」

途端、御子沢の顔色が変わった。

「非常に残念、貴方の計画では私をクビにさせたあとに加藤沙紀でも後任にする予定だつたのでしょうか? それはもう無理な話ですね」すると瀬島はその巨体をゆっくりと動かし、大きな手を御子沢の頭にポンと置いた。

「私達はプロセスは違えどリザルドは同じ物を求めている。しかし貴方方は根本的に違つていて。そういう人は排除されるべきなんですよ。すぐに貴方の下にも口封じのお達しがきますよ」

瀬島はそう言つと高笑いをして御子沢とは逆方向に歩きだした。拳を握る。悔しくて噛んだ唇からは鉄の味がした。

「悪いけど君はもう命令に従う義務は無いのよ」

加藤はそう言った。バックから赤い閃光を放つ夕日が逆光となり、彼女の姿は影のように見えた。

「それはどういうことですか? 僕を逮捕するんですか?」

「いや、そうじゃない。捕まったのは君じゃないの」

彼女はそう言つとゆっくりと亞久に向かつて歩き出す。

「もう君は人殺しをしなくてもいい、ハウンドドッグは解体される」

「それはどういう?」

「……私がハウンドドッグ。いや、特殊警察課長だからよ」

御子沢遙。彼女は胸騒ぎを必死の抑えながら恐る恐るドアをノック

した。この先には日本のトップが居座っている。

それから少しして「入りたまえ、御子沢君」と野太い男の声が掛けられた。彼女は一度深呼吸をした後、ドアノブを回して重厚な木製の扉を開いた。

「失礼します」

そう言って彼女は早足で衣笠の下へと歩く。彼こそが今の混沌の元凶。稀代の独裁者。

御子沢はふとした怒りを沈めると手にもつたファイルを机に置いた。「独自に調べたハウンドドッグに関するレポートです。彼等には多数の問題があります。よく目を通してください」

「……サーヴァント計画か」

衣笠がそう言った途端、御子沢はゾッとした。

サーヴァント計画。彼女が知人に頼んで調べさせたハウンドドッグの極秘計画。誘拐した子供に特殊な教育を受けさせ、完璧で忠実な『人間』を作り出す計画。

倫理的のも、人間としてもまともな者がやる事ではない。それを何故衣笠が知っていたか。もしかして彼もグルだったのか。

「先程私は瀬島君、並びにハウンドドッグの各主要メンバーから辞表を受け取った。所謂責任逃れという奴だ」

「でしたら尚更」

「そして私はその前に加藤沙紀君に君の持つてきた物と全く同じ物を見せてもらつた。既に後任は加藤君に一任した。君の案、採用させていただくなよ」

衣笠はそう言ひと御子沢の渡した資料を引き出しへと入れる。

「えつと……ありがとうございました」

そう言って彼女は部屋を出る。何か抜けたような気分だった。

「たつく遙も遙よね、情報のソースが大辺だなんて。その分私が尻

拭いをせにやならなくなつたわけなんだけど

「どういふことですか？」

「亜久 聖、君はもう自由なの。狂つた洗脳教育も犯人殺害による身体能力の増強だとかそう言つた事もしなくていいの」

加藤は亜久の目の前で足を止める。

そうして彼女の細い手が彼の顔に触れた。

「今日からは私の下で働きなさい。幾分はマシになる。いや、そうしてみせる」

「じゃあ、そのあと計画を仕切つてた人たちは
「さあな、俺の知ったことじゃない」

土手道のガードレールに寄りかかって俺は言つ。

「だが、俺はどうであらうと君には選択の余地がまだあるんじやないのか？」

「……そうだといいんですけど」

俯き加減で佐藤はそういった。

ため息を着く。吐く息が白い。

「まあいい、君は自首しろ。あとは俺たちの問題だ」

俺はそういうて彼の目の前を通り過ぎる。いや、通りすぎようとした。

途端、無線がかかったのだ。今まで何の応答も無かつた暗号通信が不意に反応をした。それを見た彼が何かを言おうとしたが俺はそれを手の平を差し出して「後にしろ」と無言で制した。

「ようやく繋がった！あんた何してんのよ！」

大辺の声だった。俺は内心ほっとしながら「追つ手から逃げていた」と答える。

「そう、だつたら卑くしてちゅうだい。もう拳隆君と嶺崎ちゃんは事を起こしてゐる」

「どうこうことだ？」「

「公安に向かつたのよ」

とつぴでもない回答に俺がため息をつくと彼女はなおも話を続ける。

「で、あんた今どこで何してんのよ」

「住宅街にいる。ああ……その……」

俺は仮面をその手に持つた佐藤大樹を見やつた。戸惑つたのだ、彼が犯人であるということを言つか否かを。

「どうしたの？何があるなら早くいいなさい。もう反撃は始まった

「私たちには早くこのやうれを止めなきゃこけないのよ」

「……わかつた。今俺は鬼武者といむ」

「俺がそう言つや否や彼女は言葉を失う。

「何言つてんのあなた? アイツが犯人なんでしょ? 何を悠長なこと

」

「おい、何も分からず公安に向かつたのか?」

「どうこう」とよ?」

「黒幕は公安だ。国家公安委員長、彼女が主犯なんだ」

「じゃあ、課長は……」

「……わあな」

俺はそういうマイクの取り付けられた襟から口を離す。

「で、君はどうするんだ?」

振り返つて彼に問う。

ここに残つて自首するか。俺と同じ道を歩むか。

答えはシンプルだった。

「責任は取ります」

「いいだろ?」

決意した男の目だった。あの時の、好奇心に満ち溢れた少年ではなく。大人の世界を知つてしまつた人間の。

御子沢遙と加藤沙紀。同じ場所にいた。霞が闇、行政機関のひしめくそこに。

「ねえ、沙紀。サーヴァント計画つて覚えてる?」

「何よ? やぶから棒に」

茶色いコートを羽織つた加藤は空を仰ぎ見ながらついた。

「いや、ちょっとね。覚えてる?」

「当たり前ぢやない。あんなことがなくつかあたしにこんなことせ

つてないもん」

「それもそうね。……それで、気になつたのよ。沙紀はどうして一連の事件にハウンドドッグが一枚噛んでたつてこと」

「それは……」

加藤は何か考えるような顔をする。その姿を御子沢は覗き見る。

「あの情報、ウチの大辺ちゃんのお父さんから聞いたんっしょ？」

加藤がそう言うと御子沢は驚いて「なんでわかつたのよ」と聞く。

「なんでつてさー、彼はその当時警察の捜査官だった。それでいて私たちの先輩で親交もあつた。それ以外に何があるつてゆーのよ

「それもそうだけど

「

信号が赤に変わる。乾いた寒い空気が一人の間をすり抜けていく。ブーツを履いた二人の足は自然と同じタイミングで止まつた。

「あの時、沙紀は何も思わなかつたの？」

「何つて何よ？」

加藤は凍えた手に息を吹きかける。わずかだが暖かくなつた。そして彼女は目線を手のひらから御子沢へ移す。

彼女は驚いた。そこで見た表情が今まで見たこともないほど純粋な姿であつたから。仕事に追われ、自分を殺し続けた彼女には似合わぬ、無邪気な姿であつたから。

拳隆と嶺崎の二人は国家公安委員会に向かつて走つていた。アクセルを開けて進むバイク。フルフェイスヘルメットはガタガタと風に煽られ、揺れる。

街路樹がただの緑にしか見えない。コンクリートの塊、グレーに浮き出た緑。視界は次々と変わっていき、いつの間にか政府機関の中枢にいた。

開けた道路、黒塗りのセダンを追い抜かして進んでいく。

途端、拳隆の目にあるものが入つた。青い特徴的な服と赤く輝くラ

ンプ。本来は同業者である警察が検問を張っている。よくよく見れば顔見知りの警官も何人かいる。普通なら素通りしても構わない立場だが、今の彼らと拳隆の関係は違う。

「嶺崎、歯を食いしばってろ！」

拳隆はそう言つてハンドルを大きく切る。車体が大きく傾き、嶺崎は反射的に拳隆のライダースジャケットにしがみつく。

「ちょっと！ なにするつもりよ…」

震えた声で必死に嶺崎は言う。

「いいから口を閉じろ、舌噛むぞ！」

その言葉に嶺崎は一瞬、「え？」と口を開くが、その口は瞬時に閉まる。

バイクがそのまま検問へ突撃する。民間も、政府関係者も、あらゆる車を追い抜かして。唇を必死に閉じ、まぶたを閉じた峰崎は少しだけ涙が溢れている。

「そこのバイク、何やつて？」

警官が止めに入る。拳隆の進路上、バイクのど真ん中に。

拳隆はそれを見て舌打ちをすると僅かにハンドルを左へと切る。そして、警官との間隔はほほ無いような状況で通り過ぎる。そうしてそのまま直進したバイクはカラーコーンをなぎ倒す。あとへ目の前に立ちふさがった警察車両のみ。

あたりを見渡す。何か使えそうなものは無いか、と。しかしながら拳隆と嶺崎の周りには検問にかかる車両の渋滞と警官しかいない。これは無理やり飛び込むしかない。そう考えた矢先だった、彼の目に一つの風景が入り込む。

道を封鎖するように停められた電線工事のトラック。車高の高いその車が反対車線を遮っている姿を。

「嶺崎、飛ぶぞ！」

拳隆のその宣言に再び峰崎は驚く。今回は目を見開いただけで声は漏らさなかった。

バックミラーが無い。さつき取れてしまったのだろう。これで後ろ

は確認できないがそれでも警官が追つてきているのはわかる。エンジンを蒸す。甲高いその音と共にバイクの前輪が持ち上がる。

そうしてガードレールへと向かつ。

後輪をハンドルを引つ張ることで無理やりに持ち上げると、うまい具合にガードレールを飛び越える。だが、彼にとつて最大の難所はここからだ。

「捕まつてろ！」

再度、嶺崎に通達した彼は工事車両に突つ込む。封鎖された道へ突撃し、それと同時、ハンドルを限界まで切つた。車体が大きく左へ傾き、ほぼ地面と並行になつて滑つていく。

嶺崎が背中を掴んでくるのがよくわかつた。一瞬、工事車両の下をくぐり抜けるバイク。トンネルにでも入つたかのよづな暗さの後、再び下の明るさへと戻る。

拳隆は振り向いた。後ろには体を震えさせている嶺崎、そしてパトランプという負け犬の遠吠えをする警官たちが見えた。

ここまで来てしまつては後は時間との戦いだつた。応援が来る前に国家公安委員会へと入れるか否か。それだけが問題だつた。そのあとどうしようか、どうやつて犯人を処理するべきか。そんなこと今この拳隆の頭にはなかつた。

後方から赤いランプが照らしているのがひしひしと伝わつてくる。もう逃げ場はない。目の前に広がる大きな道路は全く車が通つていい。無理もない、これほど大規模な検問がかけられていれば。視界が開けていく。追手との差も開いていき、安堵した拳隆はゆっくりとエンジンの回転数を落としていく。そうしていくうちに巨大なビル群の中へ入つていく。その中に中央合同庁舎第2号館、即ち国家公安委員会があつた。

「嶺崎、もうちょっと我慢してくれ！」

皮のグローブでハンドルを切つた拳隆がそう言つと嶺崎はヘルメッ

ト」と小さく頷いた。そして、それを確認した拳隆も頷く。エンジンを蒸す。マフラーから煙が溢れ、それと対になつて加速する。

「行くぞ！」

カラーコーンを引き倒し、ガードマンの横を通りすぎていく。彼らは拳隆たちを止めようとするも、その間にバイクは遙か遠くへと通り過ぎていく。

前方にはガラス製の玄関。拳隆はアクセルを踏み込んだまま突撃する。少しだけ体をすぼませ、覚悟する。

衝撃が体全体に走る。嶺崎の分をカバーしようとしたせいか体全体を打ち付けたのだろう。おそらく青あざになつていて。無茶をしたな、と今更悔しながらバイクは直進する。

そうしてそのまま階段を駆け上がる。一段一段、尻へと段差から衝撃伝わっていく。後ろの嶺崎が体をすぼめてジャケットにしがみついている。

早く終わりにしないと。その一心で彼はハンドルを切り、バイクごと非常階段の方へと走った。

バイクの轟音が加藤沙紀、並びに御子沢遙の耳にも届いていた。

「下で何かあつたみたいね」

御子沢が窓から外を見ながら言った。最上階に位置する一人のいる部屋からは霞ヶ関一体を見渡すことができる。

「……そうね」

ソファに座った加藤は神妙な面持ちで返す。彼女らしくないといえばそつだらう。行き過ぎた若作りと言つうか、無駄に活潑で、それでも計算高い彼女はそこにいないように見えた。

それを見越したのか、御子沢は首のみを動かして加藤をみると「ねえ、」と話しかける。

無言で「なに?」と訴える加藤に対し、御子沢はそのまま「あなた、私のもとに戻る気はないの?」と問うた。

返答はない。彼女らしからぬ沈黙が続く。

「ねえ、どうなのよ?」「

御子沢は詰め寄る。しかしながら加藤のその虚ろ気な姿勢は変わることはない。“らしくない”彼女のままだ。

「私はね、この腐った政治体制に裁きをくれてやるの。遙、私はあの事件の時に覚悟したの。ねえ、貴方だってわかるでしょ?今の政治は狂つてる。誰かが肅清してやらないと

もう一度御子沢が問おうとした、その時、加藤の口が開いた。

「そろそろね」

加藤はゆつくり腰をあげるとスーツのポケットから赤い携帯電話を取り出す。彼女、加藤沙紀の仕事用の携帯電話。よくよくみるとそれは通話中と表示されている。

御子沢がその携帯へと気を取られないと、何かが扉を開いた。爆音と、そして扉をそのまま壊してしまいそうな轟音が響く。

常識的には想像もつかない光景だった。フルフェイスヘルメットを被つた男女が、バイクに乗つて最上階にあるこの部屋まで来る。そしてそのバイクはドリフトをして加藤のたつている場所ギリギリに停車する。

「ヒーローは遅れてくるもんだってな」

バイクを運転する男。真っ赤なライダースジャケットを来た彼はヘルメットを外しそういった。

御子沢の体が硬直する。いつたい何が起きているのか、彼女には理解するにキヤパシティが及ばない。

「ごめんねえ、遙。それでも私たちわあ、政府の犬なのよねー」

加藤が通話中の携帯を持って御子沢の下へと近づく。彼女の顔は焦っている、というより怯えている。いや、きっと何にも形容し難い負の感情を表している。

「待ちなさいよ沙紀、あなたどうこうつもりで……」

すると途端、携帯から女の声が漏れる。

「悪いけど、さつきのセリフ、録音させてもらひたわ」

携帯の向こう側の女がそう言つた後、国家公安委員会に全館放送が流れる。

『私はね、この腐った政治体制に裁きをくれてやるの。遙、私はあの事件の時に覚悟したの。ねえ、貴方だってわかるでしょ？今の政治は狂つて。誰かが肅清してやらないと』

御子沢は膝をついてうなだれる。そして彼女の下へ、加藤が近寄る。携帯の通話を切る。それと同時、何か違う音が聞こえた。他の音を、館内放送をかき消す程の轟音。

窓越しに黒塗りのヘリが見えた。そして、それに御子沢が気づいた途端、窓ガラスが甲高い音を鳴らして割れた。

ヘリをバックに、窓を割った者たちの姿が見えた。銃を持った黒いコートの男、刀を持つた白いコートの男。対になるようにして二人が立っていた。

御子沢は言葉が出なかつた。彼女はどこで間違えたのだろうか？いや、全てが間違つていたのだ。彼女も、彼女の周りも。

「悪いわねえ、まさか遙がこーも簡単に騙されるなんて、ぜんつぜん思つてもなかつたからさあ」

嘲笑するかのようなその口調。でも、そのような感情はこもつてゐるようには見えない。むしろその真逆、慈しみののようなものを御子沢は感じていた。

「どうこいつよ……私の予定通りにことは運んでいた……衣笠の悪政も白田の下に晒されたし、あのうざつたい爺も殺した。全て私が計画していた通りになつっていたはず」

「残念ねえ、そこにはなーんの問題も無いの。むしろ問題だつたのはアタシに関すること。気づかなかつた？遙はアタシを無理やり引き入れようとしたが故に計画に支障が出たつて。遙は自らの手を下さずに全てを遂行するはづだつた。その為の鬼武者、佐藤くんの復讐心を巧みに利用したつづー訳ね。アタシが書いた擬似クーデター事件のレポートでも探し当てるんでしょ？んで、それを使って彼に殺人を犯させた。でも、遙は私を引きこもうとするあまり、計画の遅延をせざる負えなくなり、結果的に協力してくれた息子まで死んだ。そう、内部でのイザコザね。遙はそれに気づかずに事を進めていた。どう？」

御子沢は黙つたまま、動く気配すらない。そんな彼女に向け、加藤は話を続ける。

「そして遂に鬼武者という架空の英雄は創りだすことが出来なかつた。それで遙は計画を早めて衣笠に関するレポートを報道機関に送りつけた後、S A Tを束ねて強行突入を図つた。お陰でウチもバラツバラになっちゃつたわね。でも、その代わりにこいつやって貴方

の隙を突くチャンスを作り出すことができた。まあ、未来ちゃんから遙が犯人って聞いたときは正直、ぜんつぜん信じらんなかつたし、信じたくもなかつたけどね」

御子沢は俯いた姿勢のままだ。そうして俯いたままぶつぶつと何かをしゃべりだす。自己嫌悪、そういうつた類のネガティブな思考が。

俺はただ、その光景を見ていた。悲痛、というよりは友人同士の温かみを感じた。互いを思うからこそ、こんなことが出来ているのだろう。

俺には俺には程遠いことなのだろう。そう思いながら右手のG33を握り締める。

「……亜久君、あとは頼んだわ」

課長が小さくそういうと御子沢と背中合わせになる。泣いているのだろう。目を押さえて、黙つて御子沢を見ないようにしている。

「大事な友人なの。苦しませないであげて」

喉から振り絞った声。大辺の操るヘリのローター音に書き消されそうな声。俺はそれを聞いて束の間、銃口を御子沢の頭へと向けた。リアサイトが彼女の頭を挟み、フロントサイトが彼女の顔と合わさる。

横にいる佐藤大樹が俺の腕を降ろさせようとする。「こんなことつて無いですよ！二人は親友なんでしょう！？」そう言つて彼は俺を止めようとする。でも、俺は銃を振り下ろすことはない。

「邪魔をするな。これはお前の関わることじゃない。俺が君の復讐に関与しないのと同じでな」

トリガーセーフティに指をかける。金属の擦れる音が部屋に響く。俺と佐藤大樹の反対側にいた嶺崎は、それを聞いた途端、目を押された。

バンッ、と銃声が鳴った。硝煙の香りが立ち込め、鮮血がほとばしる。返り血が服について、特殊素材がそれを弾く。

「あとは、君の遭遇か……」

俺は御子沢を狙っていた銃を右隣、即ち、白いコートを着た佐藤大樹へと向ける。「コートの合間、心臓へと銃を突き立てる。慈悲はなかつた。彼は気が動転して目を見開いたまま俺を見つめている。

彼も結局は俺と同じ道だつた。それがテロリズムか、それとも政府の行き過ぎた政策だつたか。それだけの違いだ。問題はその違いがどんな結果を生み出すか、だが。

「おい、亜久！」

拳隆が俺を呼び止める。でも、俺は銃を降ろさなかつた。セーフティを解除したグロックが彼の心臓に向けられる。

これで、終わりだ。一連の事件は終わりを告げ、日本はどうなるか

「やめなさい！」

途端、先程まで涙を抑えていた課長が声を荒らげていった。

「この事件、結局は私と遙の騒動。佐藤君は利用されてただけ

「しかし、それでも彼の行つた殺人は相当数です」

俺は反論する。優しさだけではどうにかなる問題ではない。俺は彼にはまだ猶予があると言つた。でも、それはそうだと思ったかつたという希望的観測にしか過ぎなかつた。結局、遅かれ早かれこういう運命だつたのだ。俺はそう言い聞かせる。

「じゃあ、貴方はなんなの？ 貴方はどうだつての？」

課長はそう言つて御子沢の亡骸へと近づく。そして彼女を抱きかかえると、「「やめんね、遙」と何度も言つた。

「佐藤君、貴方は確かに見逃すことのできない重罪を犯した。それでもまだ、貴方には生きる道はある。お父さんはなんて言つてたの？」

課長は泣きじゅぐりながら問う。

佐藤は暫くの間黙りを決め込んだ後、ようやくして口を開く。

「自分の正しいと思ったことをやれ。やがて後悔するより、やつて後悔しろ 父はそう言つてました」

「そり、じゃあ、そうしなさい」

課長はそう言つと御子沢の死体の手をクロスさせる。

「死体の処理は任せたわ。これで、全ては終わりね」

そうして死体から離れる。

立ち込めた硝煙の匂いと鉄の匂い。俺はこの状況と、佐藤大樹に自分を重ね合わせていた。俺の正義とはなんだったのか？いや、そんなもの端からなかつたのではないか？

俺は警察という正義の名で悪を成す。

そり、俺達はハウンドドッグ。冷徹にして最低の警察組織。

あれから一ヶ月。日本の政府機関は完璧に解体され、政治体制そのものが事実上再起不能となつた。

今までその国民性からか内に貯めていたものが爆発した国民は新たな政治体制を模索することとなるだろう。それもいい、それこそ国民主権なんだと。

ハウンドドッグは表向きに解体された。しかし、このような仕事は未だに残つてゐる。どんなに世界が変わつても変わらないものがこういうことだとあまり良い気はしない。

これから先、世界がどう動いていくかはわからない。戦争が起きるかもしれないし、平和が永続するかもしれない。

オフィスビルの屋上、もはや血の染まつたといつてもいいこの東京という街を見渡しながら。俺は感慨にふけつていた。

あのあと、佐藤大樹は課長からのスカウトで非公式ではあるがハウンドドッグへ配属された。しかし、彼は非常勤というか　彼にはまだ、やることが残つている。

彼の父の仇を取る。また一癖も二癖もあるのだろう。それでも俺は彼に干渉するつもりはない。

携帯が鳴つた。大辺からだ。

「急で悪いけど、新日本政府から緊急の依頼よ。密入国のテロリストの殺害、お願ひできるかしら？」

俺は一言、「ああ、」とだけ返して電話を切る。

俺たちはハウンドドッグ、この新しい秩序の中でも未だに必要な古い歯車の一部だ。

あとがき

獵犬たち The vindictive manを読んで下さり、
ありがとうございました。

攻殻機動隊の逆バージョンをつくるうといつて始まつたこのシリーズも気づけば三作目。一応の完結にはなつたつもりでいます。この小説を楽しんでいただければ幸いです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784w/>

猶犬たち The vindictive man

2011年11月30日17時47分発行